

---

# NARUTO ~ 転生と始まりと終焉 ~

魁斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO〜転生と始まりと終焉〜

### 【Nコード】

N7488V

### 【作者名】

魁斗

### 【あらすじ】

気づいたら長い行列に並んでいた主人公

その列はなんと転生待ちの列だった！！

チートな主人公がNARUTOの世界で生きていく話です

## 転生

長い長い行列

その行列の一番後ろに俺は居た

あれ？

俺なんで並んでるんだ？

つてかここどこだ？

取りあえず前に居る奴に聞いてみる

「なあ

これなんの行列？」

「あん？

なんだ知らねーのか？

これは転生する為の行列だ

今回は神の暇つぶしでサイコロを降って出た数だけ能力が貰えるらしいぜ」

転生？

転生つてあの？

つてか俺死んだんだな……

まあ別に前世には悔いがないか……ああ有ったわ……俺彼女出来なかった

おい画面の前で笑った奴後で有り難いOHANASHIをしてやる

あれから数十年間

はあ…漸く俺の番か…  
つえ？何故そんなに掛かったかって？ああ後から来た奴を先に行かしたからな  
何故そんなめんどくさい事を？っと思うだろ？  
まあもうちよつとしたら分かるよ「汝が最後の転生者だ  
さあ眼の前に有るサイコロを振るえ」

俺は如何にも閻魔ですって奴に言われた通りに眼の前に有るサイコロを振るった

出た数は……6

どうやら俺は運が良いらしい

「ほづ

6か……まさか最後の最で出るとは……

おい少年もう一度サイコロを振るえ」

……つえ？

「ど…どういう事だ？

まさかさっきのは無かった事になるのか？」

「いや

違うそのサイコロは特殊でな前世で良いことをすれば良い数に悪い事をしてれば悪い数にどちらもした場合は間ぐらいの数が出る  
そしてもし6の数を出した者が居れば次は普通のサイコロを降って  
6プラス普通のサイコロで出た数の能力をやるというルールなんだ」

へえ〜

「なら

お言葉に甘えて」

出た数は……3

……………どうやら俺の運は普通らしいな

「では6 + 3 = 9個の能力をやるう  
言ってみる」

「まずは転生者が居ない世界でNARUTOの平行ワールドに  
転生」

「うむ……」

「二つ目は？」

「容姿を家庭教師リボーンのアラウディにしてくれ」

「三つ目は？」

「年はナルトと同じで」

「四つ目は？」

「前世の記憶」

「五つ目は？」

「性別は男性に」

「六つ目は？」

「自身の能力を分かってその能力を完璧に扱えるように」

「うむ……」

聞いた所あまりチート能力は無いようだがいいのか？」

「良いんだよ」

次の三つを貰えばな」

「ふむ」

じゃあ七つ目は？」

「転生者の能力」

「転生者の能力？」

なんだその能力？」

「見た所」

俺以外にも転生者がいて能力を貰って行った

その能力だ

ああ似てる能力なら強くて使いやすいほうをくれ」

これが俺が列を譲った理由だ

「ふむ……」

なるほど6つ目の能力はそう言う事か……」

閻魔？が言った通りに6つ目の能力はこのためだ

転生者の能力は強いがどんな能力か分からないし使えなければ意味がない

「ふむ

少々驚いたが良いだろう  
後二つは？」

「始まりと終焉で」

「？」

「どういう事だ？」

「簡単に言えば始まりは全ての始まり人間や神しろ始まりあつた

その始まりの力

終焉とはどんなものにも成長があり終わりが来る

その終焉の力

この二つが欲しい」

「……………」

「どうした？」

何時まで経つても何も言わない閻魔？に話しかける  
そしたら

「ククツ……………ハハハハハ！！！！」

いきなり笑い出した

何だ？頭が悪く成ったか？

つとか考えて至ら

「転生者の能力って言った時点で他の奴とは違つたがまさか此処までとわな

ツクク良かろう

始まりの能力と終焉の能力をやるっ」

そんなに俺は可笑しかったか？

まあ貰えるなら良かった

「それでは

その扉の奥が次のお前が行く世界だ」

閻魔？が後ろにある扉を指を指して言う

「ああ〜

その前にお願いが有るんだが？」

「む？

何だ言っつて見る」

「俺からNARUTOの原作知識だけ抜いてくれねえか？」

「？

何故だ？原作知識があればやりやすいだろ？」

「いや

それだと面白くないだろ？」

「ククッ

そう言う事か：良いだろう

それぐらいなら俺の権限でもどっにか出きるだろっ」

「そうか

ありがとうな」

「なに

気にするな俺を笑わせてくれた礼だ」

「そうか……」

「じゃあ俺は行く」

そう言つて俺は扉を開けて中に入っていく

S i d o 閻魔

「ククツ」

閻魔は先程の男性を思い出して笑っていた

「うん？」

閻魔「ご機嫌だな」

「ゼウスか……」

閻魔の目の前には白髪で痩せ形の男性がいた

「何か面白い事でも有つたのか？」

「ああ

実はな……」

閻魔は先程の事をゼウスに話す

「ハハハハハ！！！！」

人間にしてはユニークな発想だな！！！！」

「だろ？」

今までは無限の剣製やら王の財宝やらで詰まらんかったがまさか最後にこんな奴が出てくるとはな」

「まあ

誰かは知らねーがそいつに神のご加護が有ることを……」

「神のお前が言うか……」

呆れた目で見た閻魔

まさか創造神ゼウスに面白いと思われている事を主人公は知らない

転生（後書き）

「おい作者」

なんだい？

「何故俺の名前が出てねえんだ？」

ああ……うん

いやね……君の名前が……ね？

「……なんだよ」

いや……余りにも可哀想でな……

「一体どんな名前なんだ？」

ああ……全 夜半音【ぜん 夜半音】……

「……………」

さてさて……主人公がショックしてますが次回もよろしくね



## 転生完了

「あぶあぶあぶ……あぶ？（どうやら転生完了のようだ……あれ？）」

主人公は自身の声に疑問を持った

「ふふ」

疑問を持っていたら隣から急に笑い声が聞こえたのでみてみたら女性  
性がいた  
可愛いより綺麗な銀髪の女性がいた  
だがそんな事よりも主人公が氣に成ったのは

「あぶっ！！！（デカっ！！！！）」

そうデカいのだ

……胸じゃないよ？

あついや確かにでかいけど……って何を言わす！！

コホン！！さてさて氣を取り直して

デカいのは身長だ

巨人ですか？とまではいかなくともデカい

そんな事を考えていたら逆方向から声が聞こえた

「この子の髪

君に似て綺麗な銀髪だね」

「ふふ

目はあなたに似て透き通るような水色ですよ

「ふふ

目はあなたに似て透き通るような水色ですよ

「紛れも無く僕達の子供だね」

「ふふ

そうですね

俺を見ながら2人はいう

……まさか

俺は自身の手を見た

……小さい

「あぶぶ〜〜（赤ちゃんからなの〜〜）」

「ふふ

元気が良いわね

「そうだな

……そうだ

この子の名前を考えたんだが

思い付かなくてね

出来ればエミに決めて欲しいだ

何故名前って言った途端悲しく成るんだろうか

「そうね……アラン……アランなんてどうかしら？」

「アラン……いい名だね

さすがエミ

良かった……何が良かったのだろうか？

「これからあなたの名前はアラン  
青葉アランよ」

青葉アラン……それがこれからの俺の名前

さてさてあれから数時間後……

いま僕はチャクラの確認している  
ん？一人称や言い方が変わってるって？

ああそれはね只単に見た目がアラウデイに成るなら俺って一人称よりも僕の方が良いと思ってるね  
話を戻して

転生して僕は修行法を考えただけど……まあ赤ん坊の僕に何が出きるんだ？って話で取りあえずチャクラの確認をしようと思う  
どれどれ……

数分後

随分……速く見つかったな

青い靄？みたいものがあつた

それ以外にも赤色、薄い青色、薄い赤色、黄色、白色等々の靄？も  
感じられた

感じられたと同時に頭にチート能力の使い方等が流れてきた

白眼……写輪眼……永遠の万華鏡写輪眼……輪廻眼……ギアス……  
直視の魔眼等や完成【ジ・エンド】……大嘘つき【オールフィクシ  
ョン】……知られざる英雄【ミスターアンウン】……光化静翔【  
テーマソング】etk……の使い方が頭に流れてきた

どうやら初めの青色の靄？ 以外は魔力、妖力、霊力、気力等らしいな

……分けるのはめんどくさいね

……出来るか分からないけどやってみようか

数分後……

……上手くいったね

何をしたかって？

チャクラや霊力等その他全てを一つにしたんだだけだよ

数分で出来るのかって？ 始まりの能力で新しい能力を作って終焉の能力で進化させて完成【ジ・エンド】で上手く操れるようにしたんだよ

そして作った能力は合体【ドッキング】

効力は一度だけ自身が合体したい2つの力を合体出来る能力だよ

何故一度だけかと言えば始まりの能力で強力な能力作ろうと思うとチャクラ等を多く使うからだ

なので一度だけと言う制限をかけた

そして作った能力を終焉の能力で成長させて合体したい能力の制限を無くしてチャクラ等全てを合体した

合体した力の色は銀色みたいな靄だった

そして合体【ドッキング】は無くなったさて次はチャクラコントロールだね

………地味

凄く地味だ

どんなだって？

簡単に右の腕にチャクラを集中させてそのまま左腕、右足、左足に

移動させてるだけ

数分後

さて今日の修行は終了だね

修行が終了した同時にお腹が空いてきた

ぐううう~~~~

そんな時部屋のドアが開いた

「あらあら

お腹すいたのね」

そう良いながら胸を出す母親……っちょー！待ってー！何してるの  
！……！「いまおっぱいあげるからね」

……そうだった……！

今俺赤ん坊だった……！

ん？口調が戻ってるって？

いやいや今それどころではないからね……！

「は……い

いっぱい飲んでね？」

「あ……あぶぶぶ……！！（い……イヤアア……！！）」

数分後

ねえ……今羨ましいと思った人かみ殺すよ？

転生完了（後書き）

良かったな

普通の名前で

「まあね

……まあもし普通の名前じゃなかったら作者をかみ殺してたよ）  
ボソツ」

ガクガクブルブル

え…えつと…こ……今回主人公のアラン君が魔力等を一つにしてま  
したが完全なる作者の想像です

合体させたチャクラ？の色が銀色だったのも作者の想像です

「ねえ

なんで銀色にしたんだい？」

あああれね

初めは金色にしようと思ったんだけどアラウディには金色似合っ  
てないなって

「まあ……確かにね」

ならばまだ想像が出来る銀色にしたんだよ

まあ紫も考えたんだけどそれだと面白くないしね

「へえ〜」

そうなんだ」

それではまた次回

「見ないとかみ殺すよ？」

ねえ

なんで雲雀さんなの？

「……アラウディの喋り方が分からなかったただけだよ……」

## 転生2年間の出来事（前書き）

第三話の始まりだよ～～～  
作者の魁斗です

「第三話が始まったんだね  
やあ主人公の青葉アランだよ」

さて今回は九尾事件と主人公のアランの決意が出てくるよ～～

「僕の決意？  
ワオ楽しみだね」

初めてワオ頂きました！！！！

「君を見てるとかみ殺したくなるよ」

「では第三話の始まりです！！！！！！」

ツバ

逃げ出した作者

「逃がさないよ」

追いかけるアラン

「ギャアアア」

## 転生2年間の出来事

転生完了してから3ヶ月がたった

僕は何時ものようにチャクラコントロールを行う

最近ではスムーズに右手左手右足左足とチャクラを集中出来るようになった

そして修行が終わった時にいきなり部屋の扉が開いて父さんと母さんと何人かの忍が部屋の中に入ってきた

入ってきたと同時に母さんと父さんは僕を抱き上げてギュッと抱きしめて僕にしか聞こえない声で何かを言った後他の忍の人に僕を渡す

「それでは

お願いします」

父さんは何時もニコニコしていた顔を苦痛に歪め母さんは涙を流すのをこらえていた

忍の人は一度頷くと勢い良く飛び出して行く

数時間後

あれから忍の人は僕をどこかの部屋のベッドに寝かせてどこかに行った

僕は何もする事が無かったので少し寝ていた

誰かの声が聞こえてきたので目を開けると三代目火影がいた

「すまん……すまん

儂が不甲斐ないばかりにお主の母親と父親を………」

其処まで聞いて悟った

(ああ母さんと父さんは死んだんだ……)

我ながら冷たいと思った

どちらにしても暮らしてたのはほんの数ヶ月なのだから悲しくない……悲しくないのになんで

「お主もやはり悲しいのか」

なんで涙が出てくるんだ

なんで……父さんと母さん顔を思い出すんだ……

なんで……父さんと母さんと暮らした日々を思い出していくんだ……

なんで……なんで……二人の最後の言葉を思い出すんだ

『アララン……』

私達(俺達)はあなたを(お前を)愛している

私達(俺達)の息子に生まれてきてくれてありがとう『』

ずるい……ずるいよ

ずるすぎだよ

死んじやったら伝えられ無いじゃないか

僕も好きだよって……僕は転生して初めて泣いた

泣いて泣いて決心した

僕はその2人の分だけ生きて生きて最高の人生だって思えるくらい生きて死んだ後は天国にいる母さんと父さんに自慢して色々な話をして『好きだよ』って『僕を産んでくれて……愛してくれてありがとう』って伝えるんだ

それが僕に出来る最初で最後の親孝行だから……

一才時……

あれから色々あったが僕は三代目火影の養子になった

養子になったあと取りあえず立つことと喋れるように努力をした  
立てないと何も出来ないからね

そして最近漸く歩けるようになった

話す事はまあ……少しぐらい出来る

取りあえず歩けるようになった僕は監視の目を盗んで変化の術と影  
分身の術を覚える事にした

変化の術はコツを掴んだら数分で出来た

影分身も転生者の能力の中にあつた超大天才のお陰で数十分で出来た  
超大天才とは名の通りに天才を超えた天才が大天才で大天才を超え  
た天才が超大天才それをまた超えた天才が超大天才らしい  
どんな事でも人より速く習得出来るらしいよ

さて影分身を習得した次に終焉の能力で影分身を進化させる

進化した影分身の能力は自身のチャクラが無くなるまで影分身は消  
えないと言うチート能力になった

影分身の術がチート能力に成つたあと影分身の術をして作つた  
だいたい10000人

10000人の僕は同時に変化の術をする

僕の影分身は鳥、蝶、虫 e t k …… に変化した

影分身達に修行法方を教えて外に飛ばした

練習法方は簡単に1000人ほどに始まりの能力の特訓次に1000  
0人に終焉の能力の特訓次に10000人に転生者の能力の特訓に2  
0000に体術の特訓に20000人に新しい術の開発&実践に使える  
ように特訓残りの30000人に実践練習つとこんな感じに分けた

二才時……

最近結構喋れるようになったよ

10000人の影分身はあれから更に増やして約17000人ぐらいになった

新しく増えた影分身の割り振りは3500人を新しい術開発&実践に使えるようにするための特訓に

残りの3500人は実践特訓に行かした

本体の僕は取りあえずチャクラコントロールの向上をしている

チャクラコントロールだけは影分身に任せず本体の僕がしている

僕も出来る事はする事にした

まあ一才の時点で原作のサクラ以上チャクラコントロールはあったけどね

最近のチャクラコントロールの修行法は右手の人差し指だけに集中等と難しく成ってきたが何とかやっている

それから影分身を解くのはアカデミー卒業時に全て解くつもりだ

転生2年間の出来事（後書き）

「……………」

「どうやら作者は死んだようだ「死んでないよ!!」……………ッチ」

「まさかの舌打ち!?!」

「舌打ち何てしてないよ?」

「本当に?」

「本当だよ」

「本当に本当?」

「本当に本当だよ」

「本当に本当に本当?」

「君……………しつこいよ」（殺気）

「す……すいませんでした」（ガクガクブルブル）  
作者が落ち着くまでお待ち下さい

「そ……それでは次回もよろしくね!!!!」

「次回も見ないとかみ殺すよ?」

原作キャラとの出会い（前書き）

「今回初めての原作キャラが出てきます!!!  
作者の魁斗です」

「本当かい？」

主人公の青葉アランだよ」

「本当だよ

……そしてアランのハーレム一号でもある」

「何か言ったかい？」

「な……何も無いよ」

（よし聞こえなかったな

聞こえてたらかみ殺されたから良かった……）

「そう

ねえ今無性に君をかみ殺したいんだけど」

「っえ?!」

「じゃあ行くよ!!!」

「ギアアアア

つてか毎回こんなかん……ギアアアア!!!!!!」

## 原作キャラとの出会い

僕は三歳に成った

影分身修行から約一年たった

今日は火影と一緒に日向一族に向かっている

どうやら青葉一族は木の葉でも有名な一族だったらしい  
だからなのか有名な日向一族の娘の誕生日に呼ばれた

因みに青葉一族は今僕しかない

どうやら青葉一族は元々少なかったらしくこの前の事件？で僕以外  
死んだらしい

アランは原作知識を忘れてるため九尾事件も忘れてます

次の日

今は日向一族の娘の日向ヒナタの誕生日の祝いがあった次の日ヒナ  
タの父親とヒナタの稽古を見せて貰ったよ

でも稽古の前に慌ただしかったけど何かあったのかな？ アランは  
ヒナタ誘拐事件も忘れています

まあそれは良いとして

稽古を見た感想はヒナタははっきり言って弱いね

別に力とか強さではない強さならこの年で強い方だろうね  
ただ心が弱い……いや優しすぎなんだね

稽古を見せて貰ったあとヒナタはどこかに行ったあと帰ってきてい  
ない

ヒナタの父親

ヒアシと言っらしい

に探してきてくれな

いかと頼まれて暇だったから探しに来ただけど……  
全然見つからないね

「ひっく……ひっく」

うん？

誰かの泣き声？

取りあえず泣き声のする方へ行ってみようか

草木などの奥に行くと湖がありそこに探していたヒナタがいた

「やっと

見つかった」

僕は泣いてるヒナタに近づいてそう言った

s i d o ヒナタ

今日は私の誕生日

だから色々な人が私の誕生日を祝に来てくれた

私が色々な人をみていたら優しそうなおじいさんがやって来てお父様とお話をしていた

話が終わったのか優しそうなおじいさんは私を見てニコツと笑って

「初めましてじゃな

ヒナタちゃん君に紹介したい子が居るんじゃ

君と同じ年なんじゃけど会ってくれるかのう？」

私と同じ年の子……

今まで私と同じ年の子と会ったことが無いから不安だけど……

こんな優しそうなおじいさんの知り合いなら大丈夫だよね？

「は…はい」

「そうか」

なら少し待っていておくれ

アラン！…！」

優しそうなおじいさんがアレンっと言う名を言ったら後ろの人混みから私より少し背が大きくて太陽でキラキラ光る銀髪で透き通る青い瞳を持った格好いい男の子がやってきた

「なに？」

「アラン」

この子がさっき話していたヒナタちゃんじゃ

僕は少しヒアシ殿とお話するからアランはヒナタちゃんとお話して  
いてくれんかのう？」

「ふ〜ん……」

まあいいよ」

銀髪の少年が答えたあと優しそうなおじいさんはお父様と話をしました

優しそうなおじいさんがお父様に話かけたと同時に銀髪の少年が私に話かけてくる

「僕は青葉アラン」

呼び方は好きな呼び方で良いよ」

「わ…私は日向ヒナタです」／／／

私は恥ずかしさで顔を下に俯けた

「どうやら僕は嫌われたようだね」

アラン君は苦笑いする

ち…違うよ!!!

「それじゃ

儂達は行くからのう

また会おうヒナタちゃん」

話が終わったのか優しそうなおじいさんはそう言ってアラン君と一緒に人混みに入ってしまった

初めて会った同い年の人なのに……

私は残念な気持ちで今日1日を暮らした

次の日……

今日もお父様と一緒に稽古をする

そう言えば朝から何か騒がしかったけど何かあったのかな？ ヒナタは恐怖の余り記憶が飛んでいます

取りあえずお父様がいる稽古場に行った

稽古場にはお父様と昨日の少年

アラン君

がいた

ビックリした私がお父様に聞いたら

「アラン君が日向の力を見てみたいと言ってな」

つと言った  
そうだったんだ……  
取りあえずアラン君が見ている以外は何時も通りに稽古に入った  
そして何時も通りに負けた  
お父様は厳しく

「それでも日向一族の本家か！！！！」

つと言ってきた

そして漸く稽古が終わったと同時に私は重い足取りで庭を歩いて  
いった

そして私のお気に入りの湖について私は泣いた  
泣いて泣いて何時間かたった時後ろから声がかかる

「やっと

見つかった」

振り向いたら銀髪少年アラン君がいた

「なに泣いてるんだい？」

アラン君は私の隣まで来て私が泣いている理由を聞いてきた  
私は素直に話した  
お父様が言った通り私は日向の落ちこぼれなんだ……私がそういっ  
たらアラン君はいきなり

「フフツ」

笑い出した

私はなぜ笑ってるのかが分からなくて何故笑っているのかを聞こう

と思つたら先にアラン君の口が開いた

「ヒナタ君は馬鹿だね」

っえ？

私は思いがけない言葉に啞然としていたらアラン君は続けて言った

「誰にだつて不得意な事はあるよ

勿論ヒアシ様にも僕にもね

それと同時に誰にも負けない得意な事だつて皆あるんだよ」

「……あるかな？

誰にも負けない事……私にも」

「あるよ

少なくとも僕は知ってるよ」

「っえ？」

私が誰にも負けない事

アラン君は知ってるの？

そう思つてたらまるで心の声が聞こえるかのように私の質問に答えた

「ヒナタは誰よりも優しい……それがヒナタの良いところだよ」

優しい……親戚皆に言われ言葉

初めは『優しい子だね』とだけ段々と『優し過ぎて忍に向いてない』って言われた

アラン君の言葉を聞いて親戚の皆に言われた事を思い出していたらアラン君がまた話し出した

「確かに優しすぎるね」  
「やっぱり……」

「でも優しいからこそ出来る事があるよ  
優しいからこそ他人の気持ち分かる  
優しいからこそ困ってる人がいたら助けてあげられる  
誰にでも出来る訳じゃ無い  
だから ヒナタは凄いなだよ」ニコッ

初めてそんな事言われた  
心の中が凄くポカポカしてきた  
「じゃあ  
帰ろうかヒナタ」

アラン君は私の手を握りしめて歩き出した  
アラン君ありがとう

夜……

アラン君…… / / / /  
何でだろうアラン君の事考えると顔が熱く成ってきたよ / / / /  
私アラン君の事が好きなのかな? / / / /  
… ああそう言えばアラン君私の手を握りしめて……… ボンッ / / / /

アランが自分の手を握っていた事を思い出して顔を更に赤くするヒ  
ナタだった

原作キャラとの出会い（後書き）

「ピクピク

「今回死んだよう」「だから死んでないって!!」…… ツチ今度はかみ殺してあげるよ……」

「今不吉な声が……」

と…とにかく初めての原作キャラはヒナタでした!!

次回（次回って言うても直ぐですが……）は主人公設定です」

## 主人公設定（前書き）

「今回は主人公のアランの設定です  
作者の魁斗です」

「僕の設定かい？  
主人公の青葉アランだよ」

「そう君のプロフィールって言えば良いのかな？  
を書いたんだよ」

「へえ」

「勿論前世の名前とかもね」

「ピク……名前？」

「君かみ殺して欲しいの？」

「……っあ」

「え……えっと……ごめんなさい」

土下座

「許さないよ」

「ギヤアアア」

「こ……このネタばかり……バタッ」

## 主人公設定

転生前（前世）

名前

全夜半音

転生後（現在）

名前

青葉アラン

転生前（前世）

年齢

18才

転生後（現在）

年齢

3才

好きなもの

仲間、小動物（人とかではなく猫とか）戦い

嫌いなもの

甘いもの、ムカつく奴

髪の色

銀色

瞳の色

青色

容姿

アラウディを幼くした感じ

一人称

『僕』

ステータス

( )内は本気時です

筋力

B (特定不能)

速力

A (特定不能)

チャクラ

A +

チャクラコントロール

A +

能力

最強

チャクラA +は九尾並みのチャクラの約倍のチャクラ量です

神から主に貰った能力

転生者の能力

今まで転生させてきた人たちにあげたチート能力全て

始まりの能力

色々使い道がある

例えば古いものを新しく出来たり新しい能力を創ったりできる

但し大きい能力にを創る場合その能力を創るのに必要な分だけのチヤクラを消費する

終焉の能力

終焉つまり終わり

これも様々な使い道がある

例えば始まりの能力の逆で新しい物を古くしたり進化できる能力を進化させたりできる

何故能力を進化させられるかと言ったら終焉＝最終進と言った感じで進化させられる

ぶっちゃけ始まりの能力と終焉の能力があれば大抵何でもできる

設定

知らず知らずのうちに死んでしまっただけで転生の列に並んでいた主人公取りあえず流れに任せて転生した

容姿がアラウデイだからアラウデイみたいな口調にしようと思ったが分からなかったのでアラウデイに似ている雲雀みたいな口調にしている

ただ性格が違っているので似てない時がある（逆に似てる時があるのかな？）

## 主人公設定（後書き）

「どうだった？僕のプロフィールは……」

うん？作者かい？彼なら今閻魔に会いに行ってるよ

そんな事は良いけど僕の前世の名前に触れたらかみ殺すよ？

じゃあ次回もよろしくね？

見なくてもかみ殺すからね？」

うちは姉妹との出会い（前書き）

「今回はタグに書いたとおり性転換原作キャラがでます！！  
作者の魁斗です」

「誰かは分かりやすいね  
主人公のアランだよ」

「まあ確かに題名を読めば分かるよね……」

「分からない人は馬鹿だね」

「とりあえず本編スタート！！！」

## うちは姉妹との出会い

ヒナタと出会った時から約一年経った

今日はうちは一族に来ている

日向一族に続いて木の葉で重要な一族だ

何故日向一族とうちは一族が重要かと言ったら2つの一族には特別な瞳術を開眼する場合がある

それが白眼と写輪眼

日向一族は白眼

能力は相手の点穴や経絡系をみたり遠くの方を見ること等々できる  
うちは一族は写輪眼

能力は相手の動きをが鈍く見えたり相手の術のチャクラの性質を色で見えたり相手の術をコピーしたり等々ができる

因みに青葉一族にも特別な瞳術がある

全能眼と呼ばれている

だけどその全能眼は青葉一族の初代リーダーしか発動していないらしく能力は分からない

さてさて話を戻そうか

何故僕がうちは一族に来てるかといったら

うちは一族の長？が青葉一族の生き残りの僕と会いたいらしくて三代目火影に言ったらしい

三代目火影何故僕に会いたいかを聞いたら何でも同い年の娘がうちは一族だから友達がなかなか出来ないらしく考えていたら青葉一族の僕の事を思い出したらしい

……まあ確かに木の葉でも重要なうちは一族更には長の娘と来たら話ずらいだろうね

その点僕はうちは一族と同等かそれ以上の重要な一族だからね……

まあそう聞いた三代目火影は僕に『行ってきなさい』と言ってきたので暇つぶしにやってきたんだけど……

遅いな……確か十時に待ち合わせだったよね……

因みに今は十一時です

間違えたのかな？

そう考えていたら後ろから声がかかる

「あなたが青葉アラン君ですか？」

「ワオ

僕の名前を知ってるなんて……君達誰だい？」

「ああ

ごめんね先に名乗るのが先立ってたね

私はうちはイタチこっちが妹のうちはサスケよ

ほらサスケ自己紹介だ」

「……………」

サスケと呼ばれた少女は姉のイタチの裾をギュッと握って隠れる

「サスケ」

イタチはサスケに自己紹介するようにサスケの名前を呼んだ

「別に構わないよ

名前は分かったからね」

「そう？」

「ごめんね」

「謝る必要無いよ」

「それでこれから何処に行くかい？」

「そうねえ〜」

僕がこれから何処に聞くと考え出すイタチ

……… 決まってるじゃないかな

そう考えていると後ろから声がかかる

「ねえ」

お姉さんこんな餓鬼共ほっつとして俺達と遊ぼうぜ？」

「そうそう」

つとイタチにナンパをする小食動物たち

「嫌よ」

そんな小食動物の言葉をはっきりと断るイタチ

「良いじゃねえ……あん？」

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

足を叩いてこっちに視線が来たので思った事を言ってみた

「なんだあ？

餓鬼は黙ってな！！」

「ワオ……」

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね

良いよかみ殺してあげる」

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ！！！」

「あ…危ない！！」

小食動物が殴りかかってくると同時にイタチから声がかかるが今の僕には関係ないね

「行くよ」

僕は服の中に隠していたトンファーを取り出して相手の攻撃を交わしてカウンター気味に相手の横腹に攻撃する

「ウグツ！！！！」

その勢いで回った後隣に居た男にも攻撃を仕掛けるがかわされた

「クク

そんな攻撃じゃ俺はたお……グツへ！！！！」

トンファーに仕込んでいた鎖を出してもう1人の男に当てる

「君達弱いよ」

S i d o サスケ

今日お父さんからあつて欲しい子が居ると言われ姉さんと共に待ち合わせ場所にやってきました

「あなたが青葉アラン君ですか？」

待ち合わせ場所に居た私より背が少し大きい銀髪の少年がいた  
その少年に姉さんが待ち合わせをしていたアラン君なのかと聞いている

「ワオ

僕の名前を知ってるなんて……君達誰だい？」

どうやら彼が青葉アラン君だったようだ

「ああ

ごめんね先に名乗るのが先立ったね

私はうちはイタチこつちが妹のうちはサスケよ

ほらサスケ自己紹介だ」

「……………」

私は恥ずかしくて話せなかった

「サスケ」

姉さんは私の気持ちを知ってか背中を押ししてくれた

「別に構わないよ

名前は分かったからね」

勇気が出なくて姉さんの裾をギュッと握っていたらアラン君がそう  
言ってくれた

「そう？」

「ごめんね」

「謝る必要無いよ」

それでこれから何処に行くかい？」

姉さんはアラン君に謝ったがアラン君は必要ないと言った後どこに  
行くかを姉さんに聞いていた

「そうねえ〜」

「ねえ」

お姉さんこんな餓鬼共ほっつとして俺達と遊ぼうぜ？」

「そうそう」

姉さんが悩んでいたら変な男組が姉さんをナンパした  
姉さん綺麗だからね

「嫌よ」

そう考えていると姉さんはきっぱりと断った  
さすが姉さん  
怖く無いのかな？

「良いじゃねえ……あん？」

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

二人組の男達は断れても諦めずに姉さんをナンパしようとしたらアラン君が止めた  
つて！！危険だよ！！！！

「なんだあ？」

「餓鬼は黙ってな！！」

「ワオ……」

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね  
良いよかみ殺してあげる」

相手の男達がアラン君を睨んで黙ってると言うとアラン君は相手を  
挑発？した

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ！！！！」

「あ…危ない！！」

姉さんはアラン君に言ったが私は何故か大丈夫だと思った  
アラン君なら……って

「行くよ」

アラン君はいつの間にか両手に持っているトンファー  
でカウンター気味に1人倒した  
「ウグッ！！」

1人を倒した後アラン君はそのままもう1人も倒そうとして空中で

回転して攻撃をもう1人の男に当てようとするがかわされた

「クク

そんな攻撃じゃ俺はたお……グッへ!!!」

何かを言おうとした男をトンファーから出ている鎖で倒す

凄……

「君達弱いよ」

格好いい……// // /

アラン君の顔を見ると自然と顔が赤くなる// // s i d o イタチ

今日父さんからサスケと同じ年の子とサスケが会うので付き合っ

てあげてくれって言われたので集場所までやってきたけど……

何処に行くかか……

決めていなかったわ……

私が考え事していると二人の男達が私をナンパしてきたが私が断った

断ったのにまだ諦めていないのかまたナンパしてこようとした

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

さっき会ったアラン君が男達に言った

「なんだあ？

餓鬼は黙ってな!!」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね

「良いよかみ殺してあげる」

「ちょ…ちょっと!!そんな挑発したら!!!!!!」

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ!!!!」

男達がアランを殴ろうとする

「あ…危ない!!」

私はアラン君に声をかける

次の瞬間服の中から取り出したトンファーで二人を倒した

「君達弱いよ」

「やばい…惚れちゃった///」

s i d o アラン

あの後ご飯を食べたりあまり外を出ない僕のために木の葉の里を案内してくれたり中々楽しめたよ

…けど二人共顔が赤かったけど何だったんだろっね？



## 原作主人公との出会い（前書き）

「今回は原作主人公のナルトが出ます！！  
作者の魁斗です」

「ワオ

楽しみだね

主人公の青葉アランだよ」

「まあ完璧にキャラ崩壊だけどね……」

「？」

何か言ったかい？」

「い……いや何も言ってないよ」

「……嘘だね」

「な……何故分かつ……っあ……」

「本当に嘘だったんだね

僕に嘘つくなんて……そんなにかみ殺して欲しかっただね」

トンファーを構えるアラン

「そ……そんな事はないよ？」

逃げる準備をする作者の魁斗

「逃がさないよ」

「ギヤアアア」

ま…またこの流れ…ガクッ」

## 原作主人公との出会い

うちは姉妹と出会ってから一週間位経ったある日三代目火影から会  
って欲しい子が居るとまた言われたから 三代目火影の庭で

待っているんだけど……

遅い……遅すぎる……

「お〜い

アラン」

後ろから声がしたので振り向いたら火影と火影の後ろに隠れるよう  
にしている金髪の女の子がいた

「遅かったね」

僕は少し殺気を出して火影に言う

「ハハハハ

そう怒るでない」

「……まあ良いよ

今日は許してあげるよ

それで僕に会わしたい子って誰だい？」

「おお

そうじゃったそうじゃった

アランに会って欲しい子はこの子じゃ」

三代目火影は後ろにいた金髪の女の子を僕の前に出してきた

「ほらナルト  
自己紹介じゃ」

「う…うずまきナルトです」

……何故口調に疑問があるのかな？  
まあどうでも良い事だね

「そう

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風と呼んで良いよ

それで僕をナルトに会わせてどうしたいの？」

僕はナルトに自己紹介した後三代目火影に訪ねた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成って欲しいんじゃない」

三代目火影は僕の間にそう言った  
だけど疑問が一つ有る……

「？

何故僕何だい？」

そうこれが疑問

別に僕じゃなくても良いだろうし逆に僕は自分の家からめったに出  
ない

因みにアランは三代目火影の養子に成ってますが3歳の時から1  
人暮らしをしています（家はアランの父親の家）

「うむ」

ナルトは友達作りが不得意でう

そこで余り友達居ないアランと友達に成って貰おうと思っ

嘘……ついてるね

何故分かるかって？

三代目火影は嘘をつくとき自分の頭を撫でる癖が有るからね直ぐ分かるよ

まあ別に本当でも嘘でも僕には関係無いね

「ふん」

別に構わないよ友達になるくらいならね

「そうかそうか

良かったのうナルト」

「う…うん!!」

ナルトは三代目火影の問いに戸惑いながら笑顔で答える

「それじゃあ

少しアランと2人つきりで話すかの？」

「うん」

「良いかの？」

ナルトに聞いた後僕にも聞いてきた

「別に構わないよ」

「それじゃあ  
後は頼むよ」

Sidonaルト

今日お爺ちゃんから私の友達に成ってくれる子が居るけど会うかと  
言われたので会いに行ってみる事にした  
お爺ちゃんとお爺ちゃんの庭に行ったら  
庭には私の髪とは逆の色の綺麗な銀髪をした男の子が居た

「お〜い

アラン」

お爺ちゃんが銀髪の少年 アラン の名前を大きな声で呼  
んだ

銀髪の彼は顔を振り向けて

「遅かったね」

不機嫌そうにお爺ちゃんに答えた

アランが殺気を出したのは火影だけです  
それに少しだけ殺気を出ただけなのでナルトに向けてもナルトは  
気づけません

「ハハハハ

そう怒るでない」

「……まあ良いよ

今日は許してあげるよ

それで僕に会わしたい子って誰だい？」

「おお

そうじゃったそうじゃった

アランに会って欲しい子はこの子じゃ」

お爺ちゃんと銀髪の子が話しているとお爺ちゃんが退いて銀髪の子に見えやすいよう私を前にだした

「ほらナルト

自己紹介じゃ」

「う…うずまきナルトです」

私は少し緊張しながら言った

「そう

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風呼んで良いよ

それで僕をナルトに会わせてどうしたいの？」

アラン君は私に自己紹介した後お爺ちゃんにアラン君と私を会わせて何をすれば良いのかを聞いていた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成って欲しいんじゃない？」

「？」

何故僕何だい？」

アラン君はお爺ちゃんの問題にそう答えた  
やっぱりアラン君も私なんかじゃだよね……

「うむ

ナルトは友達作りが不得意でう

そこで余り友達が居ないアランと友達に成って貰おうと思っ

お爺ちゃんは私に氣遣って嘘を言ってくれた

私は友達作りが不得意ではなく私が化け物だから友達がいないんだ

……

ナルトはまだ自分の中に九尾が居ることを知りません

「ふん

別に構わないよ友達になるくらいならね」

……え？

「そうかそうか

良かったのうナルト」

「う…うん!!」

私は初めての友達が出来て嬉しくて久しぶりに笑った

「それじゃあ

少しアランと2人つきりで話すかの？」

「うん」

「良いかの?」

お爺ちゃんがアラン君と話すかを聞いてきて即答で答えた後お爺ちゃん  
はアラン君に良いか聞いた

「別に構わないよ」

「それじゃあ

後は頼むよ」

お爺ちゃんは最後にそう言って去っていった

数時間後

あれから様々な遊びをしていた

今している遊び終わったと同時にアラン君がいきなり

「ねえ

友達作りが苦手って言うの嘘だよね?」

って言うてきた

心臓がドキンツて跳ね上がったのが分かった

どうして?どうして分かったの?やっぱり私が化け物だから?

「まあ別に嘘でも構わないよ」

なんで?なんでそう言うの?構わない?じゃあ私と友達に成ってく  
れないの?

「ナルトと友達なのには変わりないしね」

私が化けも……っえ？

私はアラン君が言った言葉が分からなくて分からなくて今アラン君は何て言ったの？友達？友達に成ってくれるの？

「なにポーっとしてるの？ほら行くよ」

アラン君が私の手を掴んで走り出した

ドキドキ

何で？何でさっきまで大丈夫だったのにアラン君の顔を見たら顔が熱くなるの？

何でアラン君に手を握られるだけでこんなにドキドキするの？

何で……私アラン君の友達で終わるんじゃないかってそれ以上の関係に成りたいなんて思うんだろ？

ああ……そっか私アラン君の事が好きなのか……  
そう考えていたら

「どうしたんだい？

顔が赤いけど…風邪かな？」

アラン君の額が私の額に当たる

っえ？っちょ…ちよっとアラン君！？何してるの！…いやじゃないけど恥ずかしいよ／／／

「熱は無いみたいだね」

アラン君の額が離れていく

むうもう少ししていても良かったのに  
なんならキスしても／／／／

「でも顔が赤いから今日は安静にしとかないとね」

この後お爺ちゃんが来て寝室に行った後アラン君は帰って行った  
アラン君……また会えたら良いなあ／／／／

## 原作主人公との出会い（後書き）

今回は後書きは無しにさせて貰いました  
理由は今回この後書きで二つアンケートをしたいと思います

### 一つ目

オリジナル技を募集

オリジナル技は異常でも荷負担でも魔法でも魔術でも術でも何でも構いません  
但し技の効力や出している時の変わりようや見た目等は詳しくしてくれたら助かります

### 二つ目

原作通り？それともブレイク？

これは主にナルトとサスケです  
先ずはサスケですがアランに言われて復讐を諦めてアランと一緒に結構してうちは一族を復活させようと夢を見る  
この場合サスケの代わりにオリキャラが出ます  
それとも原作通りにさせるか  
この場合はオリキャラは出ません  
始めを選んだ方はサクラをオリキャラに惚れさせるかアランに惚れさせるかも投稿して下さい

次にナルトですが原作通りにドベかアランに修行をしてもらいそこそこ強くするか……どちらが良いでしょうか？

この二つ（三つ？）のアンケートは多い方で決めさせていただきます  
但しサクラがオリキャラに惚れても最終的にはアランを惚れるかも

し  
れ  
ま  
せ  
ん  
w  
w  
w  
w  
w  
w



## 日向の天才娘との出会い

ナルトと出会ってから数ヶ月が経った  
今僕は久しぶりに日向家にやってきた

日向家本家に入ろうとした時門の前で日向家を覗んだ少女が居た  
？何してるんだらう？

僕は興味本位でその少女に話かけた

「ねえ

何してるの？」

「ビックッ!!」

少女に話かけたら少女はビックリして此方を見た後口を開いた

「……………貴方は誰ですか？」

質問を質問で返してきた

まあ知らない人（子？）に話かけられたらこうなるね

「僕は青葉アラン

君の名前も教えてくれる？」

「私は日向ネジ……………」

「日向？」

日向なのに何故日向家を睨んでいたの？」

「ここに住むヒアシ様が私の父様を殺したからだ!!!!!!」

話を聞くと僕が前来たときつまりヒナタの誕生日の日にヒナタは誘拐された時ヒナタの父親のヒアシが誘拐した人物を殺したらしい殺した相手は雲隠れの里忍らしく雲隠れはヒアシの首を求めたが本家のヒアシの首を易々出せないので影武者を出すことに決めたその相手がヒアシの双子の弟でネジの父親のヒザシに白羽の矢が立つたらしい

そしてヒアシはヒザシに掛かってる分家の呪印でヒザシを殺したらしい

偶然それを聞いたネジは本家を恨んでいるらしい

「分家は所詮本家の玩具

籠に入った鳥だ!!空も自由に飛べない鳥なんだ!!!!!!」

……???

「君馬鹿かい？」

「な……なにっ!!!!!!」

「鳥だつて空を飛びたければ自力で籠を出れる君だつて空ぐらい自由に飛べるよ」

「そ……そんなの……むりに……」

「無理じゃないよ……」

僕だつて自由に居られるのに君が自由になれない何てないよ

……でも頑張つても出来ないなら……次は僕も手伝つてあげるよ」

「……………つえ？」

ネジは僕の言葉を聞いた後目を開けてポカーンとしている  
でも僕は話すのを止めない

「君だけじゃあ無理なら僕が手伝ってあげる  
だから……………頑張ってみよう……………空を自由に飛べるように  
籠に入った鳥だって籠さえ出れば自由に飛べるんだから」

「出来るかな？」

ネジは顔を俯かせたまま僕に問う

「出来るかなじゃないよ……………出来るんだよ」

「……………うん！！！」

私頑張ってみる……………でも出来なかったら……………そ……………その……………／／／／

俯かせていた顔をバツと上げて力強く言った後に顔を赤らめて何か  
を言おうとする

僕は次に何を言うのが分かったので

「フフッ

分かってるよ……………その時は僕も手伝ってあげるよ」

笑いながらもネジに言ってあげた

この後ネジは本家の門を恨めしく睨まず笑いながら帰って行った

「やっ…」

そろそろ出てきたらどうだい？」

僕はネジが見えなくなっただのを確認してから後ろに向かって話しかける

「いつから気づいていた？」

「ネジと話しを終えてからぐらいかな？」

嘘であるアランはネジと話すときから知っていた

因みに何故分かったかと言うと転生者の能力で視線に敏感になる能力のお陰である

「それで？」

何か用かい？」

「ああ」

ヒアシは一步前に出てきて

「ありがとう」

頭を下げて来た

「……なんだい？」

いきなり悪いけど僕には男の頭を下げる趣味はないよ？」

「……それでもだ

ありがとう」

「……どう致しまして

じゃあお礼として何時かネジに真実を教えてあげてよ」

アランがそう言った瞬間ヒアシは勢い良く頭をあげた  
ヒアシの顔はまるで有り得ない物を見る目でアランを見た

「君は……一体  
何を知ってるんだ？」

「さあね…  
少なくとも今回の真実は知ってるよ」

アランは記憶眼と言う能力でこの家に残る記憶を覗いた  
記憶眼とは物が体験した記憶を見ることが出来る目アランが創った  
能力

「じゃあね  
また会おう」

アランはそう言ってヒアシに背を向けて歩き出す

「……ライトとエミは最後に凄いものを置いていったな  
流石木の葉の鉄壁と木の葉の妖精の息子と言うことか……」

ヒアシがそう呟いた言葉をアランは聞こえなかった

s i d d o n e j i  
フフフフ

っえ？何笑ってるか？

それはね？今日嬉しい事があったんだ

何があったのか？それはね……ある銀髪の優しい男の子に会ったんだ



## 日向の天才娘との出会い（後書き）

「アンケートの結果サスケの変わりのオリキャラを出します  
サクラは今の所は勘違いで行きたいです

ってかサクラ嫌われてるね……殆どNARUTOの小説でアンチさ  
れてるし……

まあ僕もあまり好きじゃないから良いんだけどね

だけど最終的にサクラもハーレムに入れようと思います

もしもサクラを最初っからハーレムに入れるべきって意見が出た場  
合検討させてもらいます

それではまた次回！！！！」

## 復讐の先（前書き）

「今回はサスケが復讐を誓うのか誓わないのかをかけた回です  
まあ……ぶつちやけ分かつてる人いっぱい居ますよね？」

「つてか……雲雀さんの性格で説得？は難しい」

「でも雲雀さんの性格に似させてるだけで雲雀さんではないのでその  
辺はしっかり分かった状態でお読み下さい」

「……アラン君どこに居るんだろうって？……秘密です」

## 復讐の先

ネジと出会ってから数ヶ年が経ち僕は七歳に成った時事件が起きた  
事件の内容は下に書いてあるよ

うちは一族皆殺し

加害者

うちはイタチ

被害者

うちは一族

但し生き残りが2人存在している

生き残ったのはうちはイタチの妹うちはサスケ

うちはクウロの二名である

それを聞いた僕は取りあえずサスケに会いに行ってみる事にした

数分後……

取りあえずうちは一族の土地に着いたけど……

サスケはいないね……

仕方ない…違う所も探してみようか……

数時間後……

あれから数時間探したものの全く見つからない

夕日が落ちてきたので今日は諦めて家に帰ろうとしたとき

湖の橋？の所に座っているサスケを見つけた  
僕はゆっくりサスケに近づいて話しかけた

「何してるの？」

「！！！！！！」

……………アラン」

サスケは振り向いた瞬間驚いていたが直ぐ元に戻って僕の名前を呼ぶ

「それで

此処で何してたの？」

「……………実はね」

サスケから今回の事件の事を聞いた

……………記憶眼で見た記憶と一緒にだね……………但し真実とは違うね

記憶眼でイタチの任務の事を偶然知った

でも……………今僕が真実を教えてもサスケは信じないね

これは……………本人から聞かなきゃいけない

はあ……………全く面倒な姉妹だね

「……………それで

サスケはどうしたいの？」

僕はサスケの話しを聞いた後僕はサスケに訪ねる

これからどうしたいのかを……………

「復讐したい！！！！」

私から父さんを……母さんを奪った彼奴に復讐したい！！！！」

「復讐した後は？」

「そ……それは……」

復讐したい気持ちを聞いた僕は復讐をした後の事を聞いたがサスケは考えていなかったのか答えられない

仕方ないね……

僕は違う質問をした

「サスケは復讐して何をしたいの？」

何をしたいの……復讐したから父親、母親が生き返る訳ではないなら……何故復讐したい？

「……………それが私の生きがいだから」

「……………馬鹿なの？」

ネジの時も思ったけど……何故自分で全てを決めてしまっただろうかね？

「つえ？」

サスケは僕の顔を見てくるが僕は気にせず話を続けていく

「生きがい？ならイタチを殺したら死ぬのかい？  
生き残ったのに自分で自分の命を奪うのかい？  
それで君は満足なのかい？……違うね  
そんなので満足になる人間なんていないよ  
それにイタチにも事情があったのかもしれないよ？」

「そんなの……彼奴に有るわけ……」

「なら何で君を生かしたの？」

全く僕はお人好しだね  
でも例え誰かが僕の事をお人好しと呼んでも自己満足と言っても僕  
は僕のしたいようにするだけだよ  
それが僕の悪党【せいぎ】だからね

「それは……自分の器を図るため」

「幼い君を？」

自分の器を図るなら他にいっぱいいるよ？」

「いつか自分を殺す奴として血を分けた私を……」

「自分殺すため？」

何故わざわざそんな事をするの？  
いつか自分の脅威に成るかも知れないんだよ？  
なら生かさなないよ……普通はね」

「そんなの……そんなの」

「サスケ……」

まず復讐なんかよりイタチの事を分かることから初めても良いと思  
うよ  
知った後にやっぱり復讐するって言うならそれでも良い……それは  
サスケが決める事だからね  
でも……今すぐ決めなくても良いと思うよ  
ゆっくり……ちよつとづつ分かっていこう  
僕も手伝ってあげるから」

「……本当？」

本当に姉さんに復讐しなくても良いの？」

「うん」

サスケも無理してたんだよね？好きな姉さん  
だけど同じくらい大好きな母親に父親達……どちらも選べない  
そんな狭間に居た  
無理に復讐なんてしなくても良いんだ

「うん……」

私姉さん……イタチの事を知っていく  
でも……復讐はしないよ」

「……それが今の君の答え？」

「答えかは分からないけど……私はそう決めた」

「そう」

なら先ずは自分家に帰ってご飯食べなきゃいけないね？」

「え？……っあ！！！」

もうこんな時間！！！！！！」

どうやら時間を忘れていたみたいだね

「それじゃあ僕も帰るよ」

「っあ！！」

ね…ねえ！！！！！！」

「？」

なに？」

立ち去ろうとした僕にサスケが声をかけてきたので振り返ってサスケに何か用か訪ねた

「そ…その

家近いんだけど…その…ね…き…今日……やっぱり何でもない！！！！！！」

ああ…

そう言う事ね

「ねえ」

「な…なに？」

「僕の家遠いんだけど今日君の家に泊まらせてくれない？」

「っえ？」

「駄目かい？」

「う…ううん！…！！」

「…良いよ！…！！！！！！」

こうして僕はサスケの家に泊まらせて貰うことになった

s i d o サスケ

あれから家に帰ってきてても落ち着かずにいたため料理とかはアラ  
ンに着くつて貰った……ううゝ本当は私が作るつもりだったのに…  
でもアランの料理美味しかったなあゝゝ

それにしても……相変わらず格好いいなあ／／／／  
格好いいのに優しいなんて卑怯だよアラ／／／／

ああ……明日も楽しみだな！！！！

## 復讐の先（後書き）

「やあ

前書きでは居なかったアランだよ

どこに行ってたかった？

ある作者をかみ殺しに行ってたんだよ

まあそんな事はどうでも良いとして今回のグダグダな話を楽しんでくれたかい？

楽しんでくれたと言ってくれる読者がいたら作者の代わりに僕から

お礼言わせて貰うよ

ありがとうね

では次回も見てくださいなきゃかみ殺すよ？」

## 特別編小さく可愛くなったアラン（前書き）

「めずらしく連続投稿です!!!」

……但し特別編

今回は何時もみたいにシリアス？ではなく笑い？です

ぶっちゃけノリで書きました

キャラ崩壊してますサスケが……アランのキャラが一気に変わります  
嫌な方は見ないで下さい」

## 特別編小さく可愛くなったアラン

さて……今日は何をしようかな？……うん？何だい？この薬？

これ飲めば良いこと有るよ……いやマジで……！！！！  
神様より

ワオ……面白そうだね……

アランは如何にも怪しい薬？を開けて飲んだ

ポフンっ！！！！！！

飲んだ瞬間爆発音がして白い煙がアランを包む

s i d o サスケ

昨日はアランに説得されてイタチに復讐をするのを止める事にした  
復讐はしないけど一発殴るくらいはするよ？

そんな事を考えていた時だった……

ポフン！！！！！！

いきなりアランが泊まった部屋から爆発音がした

「アラン！！！！！！」

私はアランに何かあったのかと不安に成りながらアランが泊まった

部屋の前に行って一気にドアを開ける  
ドアを開けたら白い煙がたっていたが今は気にする余裕が無い私は  
部屋の中に入っていた

「アラン！……アラン！……アラン！……アラン！……」

私は夢中にアランの姿を探していたら煙が徐々に薄れていき部屋の中心位に人影があった

「アラン！……」

私は漸く見つけたアランに近づいた

「アラン……」

するとそこには……

「なんにゃい

きみゅ……かみゅこりよしてほちいの？」

【なんだい

きみ……かみ殺して欲しいの？】

舌足らずの声で身長が小さく成ったアランが居た

な……ななな……か……可愛い……これがあの格好いいアランなの？！

「？」

なにゆだめってりゅの？」

【？】

なに黙ってるの？】

可愛い〜

もう駄目抱きしめちゃうー！！！

「むきゅー！！！

く…くりゃひいー！！」

【ムグッ

く…苦しい】

な…涙目のアランも…可愛い！！！

私もう…死んでも良いかも…

一時間後…

漸く正気に戻った私は取りあえずアランの姿を堪能…ではなく何故こんな…可愛い過ぎる姿に成ったのかを探していつかまたこの姿にしよう…じゃなくて元の姿に戻そうとしている  
だが！！！

「……………」トコトコ

私の後ろに着いてきているチビアランが可愛いくて…じゃなくて何時転ぶか心配で集中できない

ジロジロ見るサスケ

そんなサスケにチビアランは…

「？

どうひたの？」

【？】

どうしたの？】

首をカクンとして訪ねる

ぐはっ！！！！！！

サスケはああ！！！！アラン可愛すぎ！！！！もう私死んでも良い！！！！  
！ポイントに9999のダメージを受けた

「な…何でもないよ」

サスケは鼻を押さえてどうにか耐えた

「ほんとおつに？」

【本当に？】

下から覗き込みながら言うアラン

ぶはっ！！！！！！

サスケはああ！！！！アラン可愛すぎ！！！！もう私以下略に9999の  
ダメージを受けた

私……今日生きていけるかな？

本気でそう思ったサスケであった

だけど……此処で死んでもしやわせ!!!!!!

本気の本気でそう思ったサスケであった

数時間後……

チビアランの可愛さ……ではなく頭脳との勝負で苦戦したサスケだが何か怪しい薬を見つける  
薬には……

小さく、舌足らずになる薬

但し1日限り

因みに小さく成ってる時の記憶は本人には残りません

っと小さく書いていた

これでまたいつかアランを小さく……ではなくアランが戻れる鍵を見つけた

1日たてば……何時も通りのアランに……

べ……別に悲しくなんかないわよ？少し……いやものす~~~~っ  
く残念なだけだよ？!

それにしても……小さく成ってる時の記憶は本人には残らないって良かったわね薬を作った人物残ってたらアランにかみ殺るされて……っ!!!!!!残らない!!!!!!それって……今アランに何をしてもアランの記憶には残らないってこと!!!!!!

「ね……ねえ？」

アラン「

「なにゆ？」

【なに?」

「1つ私の言うこと聞いてくれる?」

「うにゆ

いにこよ」

【うん

いいよ】

「ありがとう」

ナデナデ

「うにゆ~~~~」

和むアランに

ぐはっ!!!!

サスケはああ!!!!アラン可愛す以下略に9999のダメージを受  
けるサスケ  
数時間後

「じゅ…準備できた?」

「うにゆ

できゆたよ」

「じ…じゃあ出てきて」

そうサスケが言った瞬間ドアが開いた  
ドアが開いた其処には……………

「こりえでいいによ？」

黒いメイド服を来たアランがいた………って！！何故メイド服がある  
んだ！！…と言う苦情は受け付けません

強いて言うなら神とかがサスケにプレゼントしたんじゃない？

因みにサスケは余りにも可愛い過ぎるアランを見て言葉を失って  
います

「どうしたによ？」

そんなサスケにアランは首カックン&下から目線&メイド服でトド  
メをさしにいった

次にどうなるか………皆さん分かりますよね？

「ぶはっ！！！！」

サスケはああ！！！！アラ以下略に9999のダメージを受けた

サスケはこの世に悔いなし！！！！と言うかのように気絶した

因みにサスケが気絶して目覚めた時にはアランは既に元通りだった  
らしい

けどまたチビアランにさせようと企んでいたりするサスケが居た  
とか居なかったとか……………

s i d o 創造神

クククッ

俺が思った通り面白く成ったな  
ハハハハッ

今回の犯人である創造神は笑っていたとか……

s i d o アラン

何だろ……今すぐ創造神をかみ殺したい気分だよ

アランはまだ見ぬ創造神をかみ殺す事を約束した  
その時神界で創造神が震えていたとか居なかったとか……

特別編小さく可愛くなったアラン（後書き）

「はじめみえまちいて

あにえばありやんでちゅ」

【初めまして

青葉アランです】

「か…かかか可愛い過ぎる…！…！…！」

「フミユ

い…いちやい」

涙目モード

「ぶはっ

………ガクッ」

作者は気絶した

「みゅ？」

アランは首を傾げた

………取りあえず締めてくれ

「じゅかいもみにやいちよかみゅころちゅよ？」

【次回も見ないとかみ殺すよ？】

因みに【】はチビアランが言った言葉です

修正しました

## アカデミーでの日常（前書き）

「今回はアランの日常を書いてみたよ」

「僕の日常？」

「そうだよ」

……そして日常の中でのフラグもね」

「何か言ったかい？」

「い……いえ？」

何も言っていないよ？」

「そう……」

なら良いけどね」

「話を戻して今回の話は結構飛ばしています  
バンバン飛ばしていますのでご注意ください  
下さいつつてか何時に成ったら戦闘に成るだろ？」

## アカデミーでの日常

今回は僕のアカデミーでの日常を紹介するよ

ん？何時入学したかだつて？大体……サスケと同じぐらいかな？

入学式を書け？特に面白くないよ

それに……うちの作者の力量を分かっているでしょ？

メタ発言禁止っ！！！！

作者

それ……A O i a ネタだね

分かる人居るかな？

まあどうでも良いね

それじゃあ楽しんで来てよ

s i d o サスケ

こんにちわ

前回チビアランのかわ……コホンっ超可愛い姿に気絶したサスケだよ

っえ？言い直した意味がないって？其処はツツコンじゃ駄目だよ？

コホンっ……それじゃあ話を戻して

私は今アラン君の家に向かっている

何しに行っているかって？それはねアランとラブラ……ではなく一緒に登校するためだよ

っえ？いまラブラブ登校って言いかけたろうって？……イッテナイヨ？

そんな事をしてしているとアランの家が見えてきた  
アランの家の前には金髪の女の子2人と黒髪の女の子5人がいた

……またか……

「サスケ……何時も何時も来なくても良いよ？  
アランは私と登校するから」

いきなり睨めつけながら話かけてきた子はつまりまきナルト  
アランに恋心がある

「そうよ  
それからナルト？貴女も来なくて良いわよ？私がアランと登校する  
から」

もう1人の金髪の女の子は山中いの  
ナルトと同じでアランに恋心あり

「めんどくさいけど……  
アランと登校するのは譲らないよ？」

めんどくさいが口癖の女の子は奈良シカマル  
此奴もアランに恋心がある

「例えシカマルでもアランは譲らないよ？  
アランと登校するのは僕だからね！！！！」

シカマルと親友の秋道チヨウジ  
もちろんアランに恋心がある

「べ…べべ別に私はアランと登校したいわけじゃないわよ？／＼／＼／  
た…偶々通り過ぎただけだからね？！／＼／＼」

彼女は犬塚キバ何時も赤丸と言う犬を連れている  
因みにこう言ってるがアランに恋心がある

「わ…わわ私も偶々っていうかね？」

ワタワタしている女の子は日向ヒナタ

アランとは古くの知り合いでアランに恋心がある

「私はアランと登校出来れば文句無い……」

無口の彼女は油シノ

何故かは知らないが彼女もアランに恋心がある

つて！！アラン貴方好かれすぎよ！！！！

……こんなにライバルが居るなんて……

しかもアカデミーにはもっと居るし教師陣も狙ってるって噂だし……

ああっ！！もうアラン！！！！フラグ立て過ぎよ！！！！！！

そんな事を考えて居ると不意にアランの家の扉が開いた

そこには……

「君達……」

うるさいよ？」

不機嫌そうなアランが居た

「……………あ…………アラン（君）おはよう……………」「……………」

「」

「……おはよ

それで？何の用だい？」

「あ……あのね？

私達……その……アランと一緒に登校したくて……／＼／＼」

「くくくくくく／＼／＼」「くくくく」

ナルトが皆の気持ちを代弁するが……

「わ……わわ私は違うわよ？……私は……そのう……偶々って言うかね？……偶然あんたの家の前を通っただけよ！！／＼／＼」

素直になれない者が若干一名いた

「キバの事は一先ずおいといて……アラン……私達と一緒に登校して……！！！！／＼／＼」

私はドキドキする気持ちを抑えてアランに言う

「ふう〜ん

まあ良いよ……ちょっと着替えてくるから待っててよ

アランがそう言って家の中に入って行った

「くくくくくくやった〜〜〜！！！！」「くくくく」

「……やった」

「良かったあ」

「……良かった」

アランが家に入った瞬間皆が喜びを叫んだ

因みに下の3人は上がキバで中間がヒナタで下がシノである  
数分後……

アランが着替え終わって出てきた

因みにアランの服装は雲雀が着ている服です  
学ランではなく黒い服です

相変わらず格好いいなあ……って私は何を考えてるんだっ！！  
！！！！！！

「それじゃあ  
行こうか？」

「……………うん！！(…うん)……………」

アカデミー到着

sidoアラン

あれから僕達は9人全員でアカデミーに登校をした  
だけど……何故僕が頭を撫でたら皆顔を赤くするんだろうね？

ん？鈍感？

僕は鋭い方だよ？

……何だいそのため息は？かみ殺すよ？

まあそんな事はどうでも良いとして何故か男子から殺気が飛んでくるのは何でだろうね？

女子からも殺気が飛んできてるしね……

僕何かしたかい？

男子はアランがモテるから

女子はアランの周りにいる8人に殺気を送っているのだがアランは自分に送られてると勘違いしている

取りあえず到着した僕達は席に座る事にした

僕が座ったら隣にキバが座ってきた

「どうしたんだい？

僕の隣に座るなんて珍しいね？」

「べ……べべ別に良いでしょ？どこに座ろうが私の自由でしょ！！

！！」

「ふん」

僕は座ったキバを見た

キバは何故か俯きスンツとしていた

そんなキバを見て僕はキバの頭の上に手を乗せた

「ふ……ふえ？……っ／／／／」

キバは始め何が何だか分からなかったようだが分かった瞬間顔を真

っ赤にしていたよ

……そんなにイヤなのかな？僕に触られるの

「な……ななな何してるの／／／／」

「……キバが犬に見えたからつい……」

僕は小動物が大好きなんだよ

……だからキバがスンとした姿が小動物の犬に見えたから撫でてみたんだけどね……

そんなにイヤなら仕方ないね

アランはそう思ってキバから手を離れた

「っあ……っ／／／／」

キバは残念そうな声を出した後急に顔を赤くして席を立ちどこかに行った

s i d o キバ

私は何時ものように素直に成れなかった

今日だってアランと一緒に登校したかったのに嘘をついた

……アランに嫌われてないよね？嫌われてたら嫌だなあ……

そんな事を考えているとアカデミーに到着して皆各自好きな場所に座っていく

そんな中私はアランの座った席を見た……

アランの座った席にはまだ誰も座っていないかった……

チャンスと思つた私はアランの隣に座つた  
座つた瞬間アランが

「どうしたんだい？」

僕の隣に座るなんて珍しいね」

何て言つてきた

それは何時も皆に取られるからで……／／／／

「べ……べべ別に良いでしょ？どこに座ろつが私の自由でしょ！！  
！！」

まだ

私は何時も素直に成れない

「ふ〜ん」

素直に成れない自分に落ち込んだ私  
そんな時頭の上に何かが乗つた感触がした

「ふ……ふえ？……っ／／／／」

何なのか初めは分からなかつたけど良く見たらアランの手だった  
……っえ？アランの……手？

「な……ななな何してるの／／／／」

私は慌ててアランに言う

「……キバが犬に見えたからつい……」

わ…私が犬？

アランの犬……悪くないかも……って私は何を考えているんだ！！！！

そう考えていたらアランが私の頭から手をどけた

「っあ……っ／／／／」

私は残念な気持ちともっとして欲しい気持ちがいっぱいになってつい声を出してしまった

声を出した事が分かって恥ずかしく成って席を立って教室から出た教室から出た私は誰もいない廊下まで走った誰もいない廊下で崩れるように座りアランが撫でた頭を触った

「気持ち良かったなあ／／／／  
っだから私は何を考えているんだ！！！！

うっうっ……これもどれもアランの所為だ！！！！胸がドキドキするのも切なく成るのも顔が赤くなるのも全てアランの所為だ！！！！  
／／／／」

それから数分して漸く正気に戻れた私は教室に戻った

sidooアラン

何故か教室を出て行ったキバの代わりにキバが座っていた席に座る  
チヨウジ

「あ…ああアラン／／／／」

何故か顔を赤らめて僕を呼んでくるチヨウジ

「何だい？」

「きよ……今日はいい天気だね！！！！／／／／」

「そうだね」

数分後

「アラン！！！！」

そ……その……あの……ね……」

何かモジモジしだしたチヨウジ

「き……今日ね……」

アランの……為にね……お……お弁当……作ったんだ／／／／」

「ワオ

本当かい？それは楽しみだね

……でも僕が作った弁当はどうしようかな？」

「っえ？

あつ！！そ……それなら良いよ！！！！アランはアランが作った方食べなよ！！！！！！」

そう言った後チヨウジは俯いた

「……ねえチヨウジ」

「な……なに？アラン」

「僕のお弁当いらない？」

「っえ？」

でもそうしたらアランのお弁当無くなっちゃうよ？」

「僕は大丈夫だよ」

そう言いながらアランはチヨウジが持っているお弁当を取り

「僕にはチヨウジが作ってくれたお弁当があるからね」

「っあ……／／／／」

「うん？」

「このお弁当くれないの？」

「っ……っ……っ……」

「い……良いよ……！！僕が作ったお弁当で良いなら……／／／／」

「そう？」

ならチヨウジが作ったお弁当楽しみにしとくよ」

アランはそう言った後チヨウジが作ったお弁当とアランのお弁当を交換した

「……ありがとうアラン／／／／」

チヨウジは小さくそう言った

S i d o チヨウジ

やっぱりアランは格好いいよ……あんなさり気なく優しくするなんて……  
もっともっと好きに成っちゃうじゃん……

大々好きだよ……アラン／＼／  
sidoアラン

授業などが終わり今はお昼ご飯時

皆好きな場所で好きな相手（恋愛間ではない）とご飯を食べている  
僕はめつたに誰も来ないアカデミーの裏の森に向かっている  
廊下を歩いていたら急に肩を（優しく）叩かれたのでそちらを向いたらシノがいた

「シノ？」

どうしたんだい？何か僕に用かい？」

「一緒に…食べない？／＼／」

少し顔を赤らめながら言うシノ

「ワオ…シノが誘って来るのは珍しいね」

何時もはナルトやサスケ、いの等が多い

「……駄目？」

「ん？」

別に良いよ？」

僕はそう言って裏の森に向かう足を動かした

数分後

数分した時いきなりシノが話しかけてきた

「……………どこに向かつてるの？」

「僕が最近見つけた食事場だよ」

そう言つて更に森の奥を進と今までの雑草としたような場所ではなく広くて気の間から太陽の光が見えるのが綺麗で中央には大きな湖がある

「……………綺麗」

シノはそんな場所に目を奪われていた

「僕のお気に入りの場所の一つだよ  
特別にシノだけに教えてあげるよ」

「……………特別／＼／＼」

シノはアランの特別と言う言葉を気に入ったようだ

「だから

誰にも言つたら駄目だよ」

「……………言わない……………絶対」

「それじゃあ

「ご飯食べよつか？」

「……………うん」

その後今日のお弁当はチヨウジが作った物って言ったたら機嫌を損ねたので頭を撫でたら機嫌が直ったよ……………何で頭を撫でたら機嫌が直るんだろうね？

読者の代わりに言ってあげる……………この鈍感！！！！！！  
作者より

何だい

今凄くムカつく声が聞こえたような？

s i d o シノ

アランの手暖かった……………

シノはアランが撫でた頭をさすっていた

でも……………弁当の時は胸がムカムカした……………

次に胸のあたりをさすった

……………胸……………無い

アランもやっぱり胸がある方が好きなのかな？

……………明日から牛乳飲も……………

ガッツポーズをとって決意するシノ

s i d o アラン

今はシノとお弁当を食べた後シノと別れて先に教室に戻ってきた所だよ

そしてまた授業が始まる

因みに隣の席はシカマルだよ

そう考えていたら教室のドアが開きそこから担任のカズヤ先生が出てきた

「それじゃあ

授業始めるぞ〜」

今回の授業は隣の席同士で行う心動の術を行うぞ」

心動の術……医療忍術の基礎の基礎で相手の体を触って心臓が動いているかを瞬時に分かる術である

「それでは右に座ってる者は左に座ってる者の手を握れ」

右は僕で左がシカマルだから僕がシカマルの手を握る事になるね

因みに他はナルト×サスケ、いの×チョウジ、ヒナタ×シノ、キバ×サブキャラである

「／／／／」

アランの手が近づくと連れて顔をどんどんと赤らめる

それと同時に7、8人位の手が赤くなる

そしてアランの手がシカマルの手に触れて絡める

「ドキッ！！！！／／／／」

それと同時にシカマルの顔が一気に赤くなる  
そして7、8人位の手も一気に赤くなる

「手を繋いだら早速心動の術をかける」

アランは素早く片手で印を結んだ

「心動の術！！！！」

ドクドクドク！！！！

心臓の音が速い？

「大丈夫かい？シカマル」

「ふ…ふえ？／／／／  
にや…にやに？」

「心臓の音が速いけど大丈夫かい？」

「だ…大丈夫だよ／／／／？」

……………本当に大丈夫なのか？

s i d o シカマル

アランの手が私の手に…………／／／／

今日めんどろだからって適当な場所に座らないで良かった／／／／

「それでは次は逆で術をかける」

ぎ…逆？

逆って…私がアランの手を握るの！？

む…無理だよ

「？

何してるの？速く印結びなよ」

「う…うん／／／／」

私は慌ただしく印を結びアランの手を握った

この時また7、8人位の手が赤く成った

「し…心動の術／／／／」

ドク…ドク…ドク

こ…これがアランの心臓の音…／／／／

そんなこんなで今日の授業が終わり私は顔を俯けたまま帰った  
自分の手を握りながら

s i d o アラン

漸く授業が終わり皆各自帰って行く  
さて…僕も帰ろうか

そう思い立ち上がり玄関？に向かった  
玄関？からでて門？を通る時

「ね…ねえ／／／  
アランもし良かったら一緒に帰らない？／／／」

金髪の女の子

いのから声をかけられた

「別に構わないよ」

「ほ…本当！！！！／／／／」

「うん

ほら速く行くよ」

「あ……うん！！」

アランが先々行くのを少し遅れてからいのが駆け寄る

アランに追いつきそうな時足を挫いてこけそうになるいの

「あつ！！！！」

咄嗟に目を瞑つたいの

だが何時まで経っても痛み来ないので目を開けてみるとアランに抱  
えられていた

「大丈夫かい？」

「う…うん大丈夫…痛っ!!」

いのは大丈夫と言いながら立とうとするが挫いた足が痛む為立てない

「無理しなくても良いよ

僕がおんぶしてあげるよ」

「で…でも

私重いし……」

「はあ

仕方ないね……先ず謝っとくよ？悪いね」

「っえ？なに…なに…キヤア!!!!」

アランはいのの腰に手を伸ばしそのまま持ち上げる所謂お姫様抱っこである

「あ…アラン？///」

「しばらくの間我慢してね？」

「う…うん///」

その後のいののの家まで送っていった  
勿論お姫様抱っこそのままである

sidoいの

うう…///

アランが変な事するからお母さん達にからかわれたじゃない／／／

アランが送ったあといのの母親は「いの何時の間にあんな格好いい  
彼氏作ったの？」といのをからかい父親は「孫を見るのは速いかも  
な！！！！」と笑いながらいのに言い

いのはそんな事を言われて顔を赤らめていた

うう／／／／

で…でもアランの顔をあんなに間近に見れたしお…お姫様抱っこも  
して貰ったし……今日は最高の日だったなあ／／／／

アランの日常はフラグと共に毎日過ぎて行くのだった

## アカデミーでの日常（後書き）

「はい

今回のあとがきは私作者一人で勤めます

今回の話は今回新しく出てきたハーレム陣にフラグを強化しました

っえ？シノ達のフラグを立てた時の話を書け？まあ………何時かね？

っえ？それからフラグ強化無理ありません？

文才の無い作者の私が無理無しではやっていけませんよ

っえ？ナルト達は？

彼等は今まで出てきていたので無しです

っえ？TSキャラ達の容姿が気になる？

仕方ないですね………TSキャラの容姿は

ナルト

容姿

リボーンの京子の髪を金髪にした感じ

サスケ

容姿

キノの旅のキノ

キバ

容姿

とあるシリーズの御坂

シカマル

容姿

ブリーチのルキア

チヨウジ

容姿

遊戯王GXのレイ

シノ

容姿

涼宮ハルヒの長門の髪を黒くした感じ

ネジ

容姿

バンブーブレイドのタマちゃん

です

因みにチヨウジは痩せています

それからシノの口癖の「く何故ならば」は言いませんしグラサンも当然かけていませんので悪しからずに……

それでは次回も見てください

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン(前書き)

「今回アランに新たなチート能力がつきます!!  
つえ?これ以上強くなるのかって?

成りますよ

それでは本編スタート!!!!!!」

## 神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン

あれから何年か経って今僕は12才になった

12才になったって言うことは皆分かるよね？

僕は木の葉の下忍に成って3歳から始めていた影分身修行を終えた所だよ

っえ？アカデミー卒業シーンを書けっつかい？

書いても良いけどつまらないよ？

僕が分身の術をしたただけだからね

さて話が長く成ったね

今僕が何をしてるかっつて言うといきなり影分身を解いてフィードバックしてきた経験が凄すぎて気絶したただだよ

……今情けないって思ったかい？

なら君なら耐えられるのかい？何度も何度も殺される経験に？

まあそんな事はどうでも良いんだけど

僕気絶したのに何故か白い空間に居るんだけど……？

確か僕気絶したよね

なんでこんな場所に居るんだい？

「それは俺が話そう」

声が出たので声が出た方を見ればモヤシみたいな奴が居た

……体は細いけど強いね……

僕は前世のスキルで此奴がただ者じゃないことが分かった

「誰だいきみ？」

「俺かい？」

俺は神だ……それも最高神ゼウスだぜ！！！！」

親指を立てて威張る最高神ゼウス

……ウザイね

「それで？」

その最高神ゼウスが僕に何のようだい？」

「まあ

用事は2つあるんだけどよ……良い知らせと悪い知らせどちらが良い？」

「なら

良い知らせから聞かせてよ」

悪い知らせは後から聞きたいからね

「分かった……

なら良い知らせだ……お前神に成ったぜ！！！！しかも最高神クラス  
の！！！！やったね！！！！」

……ん？

「今なんて言ったの？」

「だから……お前神に成ったんだよ

しかも俺と一緒に最高神にな

最高神なんて俺を入れても2人しか居なかったんだぜ？

ああ……因みにもう1人は天照大神な」

「そんなのはどうでもいいよ  
それよりなんで僕が神に成ったりしたんだい？」

「まあ

お前が神に成った理由は五個ある

一つ目はあの永遠の影分身だ

あれのおかげでお前は12才という体で何万年も生きた事になった  
からだ

まあ何万年生きて神になる奴は沢山いるからな

2つ目はお前が転生した一族が神の血を引いて居たからだ

全能眼は神の血を引いているから出てきたんだしな

……しかもお前の場合前世でも神の血を引いていた一族だったからな  
三つ目は転生者の能力のせいだ

あまりの膨大な力だった為世界が神と認めただ

まあそれでも下級神だがな

四つ目は始まりの能力のせいだ

始まり……つまり始まりである俺や天照大神の力も使えるところわ  
けだ

まあ大抵の奴は力に負けるんだがお前は転生後で俺と天照大神の血  
を引いているから大丈夫だったんだよ

最後の理由はやっぱり終焉の能力のせいだ

理由はまあ始まりの能力と一緒に魔神や邪心死神等々の能力が使える

まあこれも普通なら力に負けるんだがそれはお前の前世の神の血が  
役にたったんだらうな

まあこれだの理由でお前は最高神になったんだな」

……何かとんでも無い真実を知ったよ

僕の家計が前世も含めて神の血を引いていたなんてね……はあまさ  
か良い話で疲れるとは思わなかったよ……

「まあ

その話はもう良いよ

それで？悪い話の方は？」

「悪い話はな……」

お前の世界に間違つて転生者を入れちゃった！！」

「……ん？」

確か転生者の列は僕が一番後ろだったし能力？に僕以外の転生者が居ない世界つて言つたよな？」

「すまん……手違いでな」

「まあ……良いよそれは

つで何故わざわざ僕を呼び出したんだい？もしかしてそれで終わるか？」

「ああ……実はなお前の世界に送つた奴を始末して欲しいんだわ」

「？」

何故だい？」

神であるものがわざわざそんな事を言うのはおかしいよね？

「いや……な

そいつが転生した理由がな……」

「なんなんだい？」

「ハーレムを作るためなんだよ」

……はい？

「そんなの僕には関係無いじゃない……」

「その所を頼む……」

やってくれたらお詫びと神昇格のお祝いとして三つ能力をやるから

……！！

だから頼む……！！

「はあ

仕方ないね

なら能力の三つを言わせて貰うよ？」

「ああ……！！

何でも来い……！！」

「まず一つ目の能力は転生能力」

「？

なんだその能力？」

あれ？

こんな会話前もしたような……？？

「転生能力は死んだ後違う世界に転生できる能力だよ  
勿論僕が言った能力を持ってね」

「なる程なる程……」

それで？次の能力は？」

「今の僕は疲れているからね  
その疲れとチャクラ等の消費を回復してよ」

「それは簡単だな……  
なら最後の能力は？」

「そうだね……  
なら………つて出来るかい？」

僕は小声でゼウスに最後の能力を伝える

「まあ

難しいがやってみよう

はあ………お前の頭の中はどうなってるんだ？今でも下手したら俺と  
天照大神2人が相手でも負けるかもしれないってえのに更に強く成  
ろうなんて」

「僕はまだまだ強くなるよ

………もう後悔はしたくないからね」

「………そうか

ああ後ろにある扉を開ければあちらの世界に戻る  
それと同時に新たな能力を追加される」

「うん

何から何までありがとうね」

アランはそう言って後ろの扉から出て行った

「頑張れよ………

悪党【せいぎ】と言う真理を見つけた神よ」

ゼウスがそう言った言葉はアランに聞こえない  
だからアランは知らない

アランが神に成った一番の理由は悪党【せいぎ】という世界の真理  
の一つを見つけた事だということに……

inアランの家

さてどうやら帰ってこれたようだね

さて…… 先ずは転生者をかみ殺すでしょうか

「能力作成…… 転生者探し…… 使用回数一回…… 創造……!!  
そして発動」

……… いたっ!!……!!

「腑罪証明【アリバイブロック】発動」

その瞬間アランが消えた

sido転生者

アハハハハ!!……!!

転生完了だ!!……!!

これでヒナタやいのを俺の嫁に出来るぜ……!!

しかもこの世界はナルト達は女と来た!!……!!

これは俺にハーレムを作れと言う世界からのメッセージだ!!……!!

違います

作者&世界より

あん？

今なんか聞こえたような……？

「まあ

どうでも良いや」

「何がどうでも良いんだい？」

突然後ろから話しかけられて振り向いたらそこにはアラウディが居た……っは？嘘だろ？なんでNARUTO世界にリボンキャラのアラウディが……？

ああ……コラボか！？

ならハルや京子も俺のハーレムに……！！！！

馬鹿な転生です

もう一度言います馬鹿な転生です

因みに今居るのは死の森です

「まあ……

僕には関係無いけど……僕は君をかみ殺すだけだからね」

つぶ……！！

何此奴……！！アニメで出てきても闘わなかった奴がチートオリ主の俺に勝てると思ってるのか……！！WWW

「行くよ」

アランはトンファーを取り出して馬鹿な転生者に攻撃を仕掛ける

「う…うわあああ！！！！…たんてね投影開始【トレースオン】  
！！！！！」

馬鹿な転生者は馬鹿な演技をして如何にも転生者が選ぶ1位2位に出てくる投影で干将・莫耶【かんしょう・ばくや】を投影してアランのトンファーを防いでそのまま後ろに下がったアランに干将・莫耶【かんしょう・ばくや】を投げつけ

「壊れた幻想【ブローケン・ファンタズム】！！！！！」

爆発した

「ははははっ！！！！！」

これで俺の勝ちだ！！！！！」  
勝ちを宣言した馬鹿な転生者

……だが

「誰が勝ったの？」

爆発で煙が立っただのが晴れてきた

そしてその場には半分黒で半分白の指輪を右手に嵌めて左手には指輪と一緒に半分黒で半分白のボックスが握られていた  
指輪には黒と白の炎がたっていてその炎をボックスの穴に注入する  
そしてボックスが開きボックスからは真っ白なトンファーと真っ黒なトンファーが出てきた

「な…なんだよそのボックス兵器は！？」

そんなの原作でもアニメでも出ていなかったぞ！？」

「当たり前だよ……  
これは僕専用の武器だからね……話はもう終わりだよ……それじゃあ行くよ?」

「ック……」

投影開始【トレースオン】!!!熾天覆う七つの円環【ローアイアス】!!!!!」

馬鹿な転生者の前に花卉状の七枚の盾が現れた

……がアランの真っ白トンファーで攻撃すると盾は何事もなく破壊された

「っな!!!!!!……っく!!!!!!」

投影開始【トレースオン】!!!約束され【えく」

聖剣を投影したが次は真っ黒なトンファーで破壊される

「っくそ!!!!!!」

王の財宝【ゲートオブバビロン】!!!!!!」

馬鹿な転生者は次の手でまたまた転生者が選びそうな能力で右手に赤い槍を取り出す

「突き穿つ死翔の槍 【ゲイボルク】!!!!!!  
まだだ!!!!!!」

赤い槍を投げたと同時に新たな剣を取り出す

「天地乖離す開闢の星【エヌマエリシュ】!!!!!!」

最強の飛び道具に最強の一撃がアランに迫る

「modechange盾!!!!!!」

真っ白いトンファーと真っ黒なトンファーが霧に変わった  
アランは片手を前に出した

その瞬間霧は真っ白い盾と真っ黒な盾に変わった

すると突き穿つ死翔の槍【ゲイボルク】は真っ黒な盾で天地乖離  
す開闢の星【エヌマエリシュ】は真っ白な盾に防がれた

「な…なに!!!!!!」

「うん……新しい力の試しはもう良いかな？  
ほら転生者君早く次の手を打たないとかみ殺すよ？」

「つく!!!!!!」

体は剣で出来ている

血潮は鉄で心は硝子

幾たびの戦場を超えて不敗

ただ一度の敗速もなく

ただ一度の勝利もなし

担い手はここにひとり

剣丘で鉄を鍛つ

ならば我が生涯に意味は不要ず

この体は無限の剣で出来ていた！！！！」

その瞬間世界が塗り替えられた

「へっ」

世界を塗り替えたんだね

それでこそかみ殺しがいがあるよ」

アランの目の前には無限の剣達がいる

「……」

僕の前じゃあ意味ないけどね

modechange銃」

盾だったものが靄になり次に銃に成った

アランは黒い方の銃で様々な方向に撃った

「ははははっ！！！！」

なにしてやがる！？この剣達に怯えて狂ったか！？」

相手はアランを挑発するがアランはお構いなしに銃を撃った

そして急にアランが撃つのを止めた

「あん？」

もう終わ……っな！？」

そして……変化が起きた世界が……塗り替えられた世界が壊れていく

「この銃は破壊を司る

こんな事は簡単にできるよ

さて……もう君には打つ手はないようだね」

そう言っつて真っ白な方の銃を向ける

「ま……まってく」

「さよなら」

バンっ

真っ白な銃を撃つと転生者は氷

砕けた……

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン(後書き)

今回のあとがきは今回出てきた真っ白&真っ黒な武器紹介です  
今回出てきたあの二つは七つの武器になります  
今回は七つの武器の能力を紹介します

刀

黒  
速さ

白  
見えない

弓

黒  
時空を超える

白  
追尾生

銃

黒  
破壊

白  
創造

盾

黒

効果をなくす（ゲイボルグ等）

白

破壊力をなくす（エクスカリバー等）

トンファー

黒

どんな武器でも壊す

白

どんな盾でも壊す

グローブ

黒

殴った後（力は無い）指を鳴らすと殴った場所が爆発する

白

馬鹿力

槍

相手の身体的能力を関係なく殺せる

以上!!!

槍は2本より一本の方が使いやすそうなので光と闇の霧を合わせた  
ら槍になりと言う設定です

……っつかチート過ぎたるっと思ながら思います

こんなチート過ぎる能力を持った主人公ですが呼んでいただけると  
ありがたいです

それからお気に入りに200を超えました!!!皆様本当に感謝しま  
す!!!!!!

それではまた次回お会いしましょう!!!!!!

はたけカカシ登場（前書き）

「今回は前回忘れていたアランの神としての能力とアランのもつ  
つの名前を出します」

「一応言っとくけど前世の名前じゃないよ？」

「それでは本編スタート……！」

## はたけカカシ登場

昨日転生者を倒したアランだよ

あの後魔改造&持ち運び型精神と時の部屋に入って昨日貰った武器の修行&影分身修行の復習をしたよ

……おかげで今はくたくただよ……

魔改造&持ち運び型精神と時の部屋とはこの精神と時の部屋は1日で二年間であり持ち運びが可能なのだ!!!!!!

今何をしてるかって？

下忍に成ったから写真？を撮って今はアカデミーの席に座ってイルカ先生を待つてるんだよ  
それにしても……

因みにイルカ先生も性転換してます

ガヤガヤ………

相変わらず五月蠅いね

ガラガラ

「は〜い!!!!!!」

静かにする!!!!!!」

イルカ先生が入ってきて生徒達を静める

「今から先生が決めた班を発表する」

イルカ先生がそう言った瞬間

「「「ええ~~~~~」」」

不満の声が上がった

「それぐらい俺達で決めさせてくれよ!~!~!」

「そつだそつだ!~!~!」

……君達

忍に成る気あるの?

誰と成ろうが関係無いよ

「静かに!~!~!」

お前等はこれから忍に成るんだ!~!~!こんな事で一々文句を言うな  
!~!~!」

イルカ先生がそう言つと皆は黙つた

「それでは一斑から発表する……………次第七班!~!~!うちはクウロ  
春野サクラ……………そして……………うずまきナルト!~!~!」

(よっしゃー!~!~!)

クウロ君と一緒に!~!~!)

(そんなあ……………アランと離れちゃった……………)

(……………フン)

分かると思いますが上からサクラ、ナルト、クウロです

「次に八班

犬塚キバ

油女シノ

日向ヒナタ！……！」

（アラン……）

（アラン君……）

（……アラン）

上からキバ、ヒナタ、シノである

「次に九班は……第十班は奈良シカマル

秋道チョウジ

山中いの

（……めんどくさい

アランとも一緒じゃないし……）

（そんな……

アランと一緒にじゃないの！？）

（ええ……！？

なんでアランと違うのよっ……！）

上からシカマル、チョウジ、いのである

「十一班……………だ」

あれ？

僕とサスケの名前だけがでなかった……………？

「そして青葉アランとこちらはサスケは特別班第零班だ」

「先生

第零班って何ですか？」

サスケがイルカ先生に尋ねる

「まあ

基本はスリーマーセル何だが今回は2人が余ったからな男子と女子から成績優秀者を入れたんだ  
まあ基本第七班と活動してくれ  
担当上忍も一緒だからな」  
これを聞いたナルトは……………

(やったあああ!!!)

思いつきりガッツポーズを取っていたとか……………

「それでは担任の先生を名前を言うぞ

先ず一班は……………第七班と第零班ははたけカカシ先生

第八班は紅先生第九班は……………つで第十班はアスマ先生つで第十一

班は……………つだ

それじゃあ担任の先生がくるまで大人しくまっ待っているよ?」

イルカ先生はそう言っ教室から出て行った

それから数分後……

第七班と第零班の担任上忍以外は来た

……それにしても遅いね

「サスケ

僕少し眠るから担任上忍が来たら起こしてよ」

「っえ？

あつ……うん分かったよ任せて」

僕は隣のサスケにそう言って眠りについた……

ん？

何だいここは……

どこかで見ることがあるような……ああ神か……

「よう

久しぶり……ではなく昨日ぶりだな」

「そうだね

……それより僕に何の用だい？」

「いやな

お前の神の名前とお前の神の能力を教えようと思ってな」

……ん？

「神の能力って創造能力じゃないの？」

「いや

創造能力は下級神だ

俺達上級神になると創造能力でも出せない能力を出す  
具体例をあげるなら天照大神の能力は始まりと終焉の炎だ」

「へえ

そうなんだ

それで僕の神の名前と能力は？」

「うん

お前の名前は阿耨美須王汰那斗簾神【あぬびすおうたのとすかみ】  
だ」

やたら長いね……

「神としての能力は死を司る……」

「？」

「良く分かってないようだな……

つまり死を司るって言うのは死体を腐らさなかったり相手に死を錯  
覚させたり出来るんだよ」

「……なにそれ

僕今でも充分なのにそんなデタラメな能力……」

「まあ出ちまったもんは仕方ねえからな

……ほら目覚めの時間だぞ」

「ん？どうい「ア……ラ……」サスケ？」

「お前今寝てるだろ  
どうやら起こそうとしてるらしいな」

「そのようだね  
じゃあ僕はもう行くよ」

「ああ  
じゃあな」

アランは光に包まれ消えた

sidoゼウス

それにしても始まりの能力と終焉の能力でだいたいの神の能力が使えるつてのにこの2つでも使えない能力をだすとはな  
しかもエジプト神の死の友と呼ばれた神アヌビスとギリシア神の死の神の名前を足した名前……  
全く未恐ろしい少年……いや本当に恐ろしいのは人間だな……創造した俺より想像力があるなんてな……

「全く……  
飽きないな人間は」

ゼウスは微笑みながらその場から消えた

sidoアラン

さて……サスケに起こされた……此処までは良い……でも何故僕達の担任が黒板消しは頭にさせてるんだい？僕が寝てる間に何があったんだい？

そんな疑問を持ちながらもアカデミーから外に行き適当な階段の所に座った

「それじゃあ

まずは自己紹介からだな

まずは……金髪の女の子から順にだ」

先生は女性です

金髪の女の子……ナルトしかないね

「先生

まずは先生から自己紹介してください」

ナルトが正論を言った

「私からか？

まあ良いか……私の名前はははたけカカシ

好きなものはまあ色々だ

嫌いなものをお前達に教える気は無い

将来の夢って言っても今更私が言っても意味が無いだろう……

……ま……こんなところだな」

……結局分かったのは名前だけだね

「それじゃあ

金髪君からだな」

「仕方無いですね……」

私の名前はうずまきナルト

好きなものは一楽ラーメンとイルカ先生と仲間です……でも一番好きなのはアラン（ボソッ）  
嫌いなものは諦めるやつと仲間を傷つけるやつ  
将来の夢は……内緒です／＼／＼」

ナルトは何故か此方を見て言った

今更ですがナルトの口調は慌ててる時とかにだってばねという設定にしました

「それじゃあ次はピンク髪の子」

「私の（以下略）」

原作の所をサスケからクウロに変えたのと嫌いなものにナルトと  
言わなかっただけ

「次に黒髪の少年」

「俺の名前はうちはクウロ（以下略）」

此方も原作のサスケとほぼ一緒なので

「じゃあ

黒髪の女の子」

「はい

私の名前はうちはサスケです

好きなものは仲間と……アランです

嫌いなものは仲間を傷つけるやつです

将来の夢はうちは一族復旧です」

サスケが将来の夢を言った瞬間クウロが睨んできたがサスケは完全に無視した

「最後に銀髪の君ね」

「僕の名前は青葉アラン  
好きなものは小動物に仲間  
嫌いなものは仲間を傷つけるやつに甘いものと覚悟のない正義かな？  
将来の夢は特に決めてないよ」

僕が自己紹介を終えると先生が口を開いた

「それじゃあ」

明日演習場に集合してくれ」

「先生」

演習場に集合して何をするんですか？」

「何……下忍最終試験だよ」

「……っえ？」「」「」

僕以外が疑問視をあげる

「あれ？」

君はビツクリしないんだね」

「だいたい」

予想してたからね」

「ふん

まあ良いか……ああそれから明日朝ご飯は食べてこない方がいいわよ？」

「な……何故ですか？」

サクラがビクつきながらカカシに聞く

「……………吐くから」

先生は笑いながら少し殺気を出してサクラに言う

殺気だすって…………アカデミー卒業したての下忍に出さないでよね

「それでは…………解散！！！！」

こうして僕達は家路についた

…………何故か僕とクウロ以外は異様に燃えていたけどね

（（アランと一緒にの為に……………！！！！！！））

（クウロ君と一緒にの為に頑張るわよ！！しゃんなるー！！！！！！）

分かりますが上がナルトとサスケで下がサクラです

まあ僕も楽しもうか

先生……………覚悟してね？

明日は僕がかみ殺してあげるから

## はたけカカシ登場（後書き）

「ねえ

僕の神としての名前のアヌビスとタナトスの話は本当かい？」

「本当だよ？

ちゃんと調べたしね

アヌビスは死の友で死体を腐らさない神でエジプトの神  
タナトスは死の神でギリシアの神だよ」

「ふ〜ん

魁斗にしては良くやったね」

「初めてほめて貰えた！！！！

……さてと……あとがきはこれぐらいにして……次回もよろしくお  
願いします」

「次回も見ないとかみ殺すよ？」



## はたけカカシVS青葉アラン

今僕は自分の部屋でいる

今の時間帯は9時30分

昨日上忍が指定した集合時間は8時00分……完璧に遅刻だね……  
っん？何故落ち着いてられるかって？

ああ……それはね

あの上忍必ず遅れると思うからだよ

何故そう思うって？

まあ昨日の出来事があったからね

後は勘かな？

まあ多分僕の勘は当たってると思うけどね

さて10時00分までに行くとして……まずは転生者狩りに行く  
かな？

っえ？前倒しただろって？

それがねあの馬神またやってくれてね……

全く困ったもんだよ

とりあえず行きましようか……

数十分後……

ある野原……

ここは数十年有名になる場所である

何故？理由は簡単……そこで死んだ数十人の死骸が“腐らなかった

”からだ

皆是個々を【死の神が居た野原】と呼ぶ……

さてと……転生者狩りも終わったし早速演習場に向かおうとしようか  
……

因みにアランが演習場についた時間はジャスト10時00分だった  
とか……

「遅い！！！！！」

着いた瞬間ピンク髪の……サクラにそう言われた  
っえ？今忘れてただろって？

うん忘れてたよ  
だって興味ないもの

「そっだよアラン……  
集合時間から随分遅いよ……」

周りのナルトやサスケもそう言ってくる

「ってか

君達あの上忍が速く来ると思ったの？」

僕は初めから思っていた疑問を三人にする

残念ながら僕は信じられなかったよ……まあ現に今居ないんだけどね

「……遅いわね」

「……そうだね」

話そらしたね……

まあ別に構わないけど……  
さてあの上忍担任が来るまでどうやって転生者を狩ったか教えてあげるよ

〈回想〉

あの時僕はとりあえず転生を見つける能力を創った後また能力を創って転生者を一カ所に集めた

「な……なんだ!？」

「ここは何処なんだ!?!?!」

「俺は波の国の近くに転生した筈だぞ!?!?!」

何十人と居る転生者の前に僕は降りた

「やあ

転生者達君

転生したばかりの君達には悪いけど……此処で“死んでよ”」

僕がそう言った瞬間転生者達は倒れていく

……何をしたかった?

簡単だよ僕の神としての力を使ったに過ぎないよ

「つぐ……!?!?!」

な……なんなんだよ!?!?!」

「俺は……まだ死にたくねえ!?!?!」

あれ？

2人も残っちゃったね

っえ？何故残ったかって？

……僕の神としての力はね複数人を相手だと生き残る“可能性”があるんだよ

まあ最低でも神とかから力を貰った転生者レベルがなきゃ駄目なんだけどね……さてどうしよっかな？あの2人は……よし……力カシと戦う前のウォーミングアップとして闘ってあげるよ

奇術師【マジシャン】&暗器術師【ブラックマスター】発動

奇術師【マジシャン】とはどんな相手でもばれずにマジックが出来る

暗器術師【ブラックマスター】とは暗器がとても上手く出来る異常である

この二つを使ってボックス兵器とリングを取り出した

因みに奇術師【マジシャン】を発動していたので指輪は指に嵌っている状態です

ポウツ！！

僕はリングに炎を灯しボックスに炎を注入する

そしてボックスから出てきたトンファー（普通）を持つ

「それじゃあ

行くよ？」

アランが脅威的な速さで相手に近づく

「つくそが……！！！！」

光化静翔【テーマソング】発動！！！！」

「setピカピカの実！！！！」

2人はアランを上回る光の速さでアランの攻撃をよける

「setゴムゴムの実！！！！」

ギアセカンド！！！！」

2人のうち1人が体が赤くなり体から煙がでる

「ゴムゴムの……JETピストル！！！！」

「光化静翔【テーマソング】……フルコーラス！！！！」

1人は目にも止まらない拳でアランに攻撃をしよう1人は何十何百となり周囲から攻撃をする

「……死の翼【デス・バッド】」

ドカンッ

「ハアハアハア

ど……どうだ！！！！」

煙が晴れ……そこには何も居なかった

「「「よ……よっしやー！！！！」」

「何を喜んでいるんだい？」

「……つな！！！！」

突然後ろから声がして振り向くと銀色に輝く髪に全てを飲み込みそうな青い瞳……そしてボロボロな黒い翼を生やしたアランがいた

「な……何故だ！！！」

光の速さで攻撃したのに……何故お前が其処にいる！？」

光化静翔【テーマソング】を使っていた転生者がアランに問う

「確かに君達は速かったよ……それも光の速さ並みにね

……でもねただ光より速いだけだよ……僕は死よりも速い」

「俺……よりも速い……だと？」

そんな事はない……俺が負けるはずがない」

「あ……有り得ない

悪魔の実の能力を持った俺が負けるはずがない……！！！！  
つくそ！！！！」

ゴムゴムの……JETピストル！！！！！！」

「そつだ……さっきのはまぐれだ……！！！！」

そつに違いない！！！！」

なら次は無い！！！！光化静翔【テーマソング】フルコーラス！！！！  
！！！！」

「君達に次はないよ」

いつの間にか転生者の後ろに立っていたアラン

「誰も僕には触れられない」

ドサッ！！！！！

アランの言葉と同時に倒れる転生者達……

～回想終了～

つとこんな事があつたんだよ……

「やあ皆おはよ」「遅い！！！！」「」「」

さてと……どうやらカカシが来たようだね  
じゃあ楽しもうか……

「それで……  
何をするんだ？」

クウロはカカシにそう聞いた

「うん？ああ  
今日わね……」

チャリン

カカシは忍具入れのポーチから鈴を4つと時計を取り出した

「この時計が鳴るまでに鈴を私から取れたら合格だよ」

「っえ？」

せ…先生それ……数あつてませんよ？」

「？」

何言っている

これであっている」

「で…でも！！」

私達5人ですよ！？1つたりませんよ！！！！！！」

「だから

それであっているだよ

必然的に1人残ると言うことは1人は最低でも失格するんだよ」

「そ……そんなの」

「忍の世界は“そんなの”って事ばかりだよ」

「っ……………」

カカシの最後のセリフで黙るサクラ

「それじゃあ

私がスタートと言ったら開始だ

因みに殺す気でこないと取れないぞ？」

少々殺気を出しながら言うカカシ

「それじゃあ……………」  
スタート！！！！」

スタートと同時に全員隠れた……………」

さて……………」

この試験の正解はチームワーク……………」わざとみんなで行けないようにしているようだけど忍の世界ではどんな任務でも成功するために何でもする……………」犠牲は必要になる今回もそれなんだけど……………」サクラとクウロは無理だね  
それに僕も1対1でやってみたいしね……………」まあナルトとサスケにはこの事は話しておくかな？

数分後……………」

取りあえずナルトとサスケを見つけて今回の試験の答えを教えた後カカシと1対1で戦いたいから邪魔しないでと釘をさした  
その代わり僕がサスケとナルトの分の鈴は取るけど……………」  
ん？どうやらクウロとカカシの戦闘が終わったようだね  
何故分かるって？僕の能力の一つの千里眼を使ってるだけだよ  
さて……………」

次は僕の番だね

s i d oカカシ

さてと……………」うちの生き残りの1人とピンク髪の女の子は倒したと……………」  
あとはあの人の娘とうちは一族のもう1人の生き残りとおの人のライバルと呼ばれた人の息子……………」楽しみだね

そんな事を考えていたら手裏剣が飛んできた

「っ!!!」

カカシは忍具入れのポーチからクナイを取り出して手裏剣を弾く

「流石は上忍だね」

手裏剣が飛んできた方向には太陽で輝いている銀髪の少年アランがいた

「今の手裏剣

当たっていたら危なかったよ？」

さっきの手裏剣は正確に急所を狙っていたからね……

「あれは挨拶だよ

それにあらぐらいしてもらわなくちゃね」

「ッッフ

言うね」

あれぐらい……少なくとも中忍では出来ない事をあれぐらい……ね

「話は此処までだよ」

アランは何処から出したか分からないけどトンファーを取り出した

「まあ

本を仕舞うぐらいの時間はあげるよ」

原作と一緒にクウロやサクラ相手に本を読んだ状態で闘ってました  
読んでいた本はイチャイチャパラダイス（男性版）です

「結構優しいね

けどそんなのいらな」

ビュン

カカシが喋り終わる前にアランがクビにトンファーを軽く当てた

「っ！！！！！」

トンファーをカカシの首から外して後ろに下がった

「次が最後だよ

本………しまいなよ」

………フフ

これは………本気をださないと駄目のようだね

「これで良い？」

カカシはポーチに本をしまった

「うん………

これで遠慮せずに鈴を奪えるね」

「簡単には取らせないよ」

アランとカカシは同時に動いた

アランが右手で殴ろうとすると左手で防ぎ防いだと同時に左手で鈴を取ろうとすると右手で抑えた  
抑えた瞬間足を上げて左足でカカシの頭に当てようとするがカカシは咄嗟に左手で防いだ  
そして開いた右手で鈴に手を触れるがカカシが後ろに飛んだ為取れなかった

「結構やるね  
君」

「……ふふ  
君本当に下忍成り立てかい？」

何処から出したのか分からないトンファー  
何時仕舞ったのかも分からなかった  
こっちに近づいたときには手元になかった……  
本当に恐ろしいね

「これは……本当に本気で行かないや駄目かな？」

「……ん？」

なに言ってるんだい？  
もう勝負はおしまいだよ？」

「ど言う事だい？  
まだ鈴は取れてないよ？」

「鈴ならもう……」

チャリン

「取れたよ」

草村から出て来たナルトとサスケとアランの手には鈴が握られている

「!!!!!!」

何時の間に……

それになんであの2人まで……？

ピリリリリ

3人が鈴を見せたとほぼ同時に時計が成った

s i d o アラン

漸く終わったね……

ん？どうやって鈴を取ったかって？

暗器術師【ブラックマスター】で目にも見えない糸をつけたと同時に鈴を2つナルトとサスケの方向に鈴を投げた後糸を引っ張って奪っただけだよ

まあ……そんな事よりどうやら終わったみたいだね

何がって？

ああこの試験の第2幕がかな？

簡単に説明すると

時間が来たので終了

みんなが集まる

サクラとクウロにこの試験の答えつまりチームワークを教える

そして鈴を取れなかった2人に忍を止める宣言をする力カシ

キレて攻撃をするクウロ

だが普通に抑えられて首過ぎにクナイを当てサクラに「クウロを助けたければアランを殺せ！！！」と言う

戸惑うサクラ

……ねえ？もしかして本当に殺す気？

あんな小食動物以下の奴のためにかい？

そんなサクラを見て殺気を出すナルトとサスケ

……何故？

取りあえずクウロの上からどいて話の途中で襲ってきた罰としてクウロには弁当を食わせるなど言っでどこか（遠く？の木の陰に）行った

なんやかんやでナルト、サクラ、サスケそして僕のお弁当をクウロに上げる事に……全部じゃないよ？流石にクウロも全部は食べれないよ？

皆のお弁当からちよつとづつ出した

あげたと同時に力カシ登場

その後力カシが「忍者は裏の裏を読むべし忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズと呼ばれる」ちよつと間を開けて「だけどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだだと私は思う！！！！」つと

言って合格に成った

……第2幕の答も当たっていたね……

まあ取りあえず明日から下忍なんだね……

ツフ……頑張ろう

はたけカカシVS青葉アラン（後書き）

「ククッ……」

読者の君達……アランの神としての能力を出すのはカカシだと思っ  
たか？……残念！！！！転生者だよ！！？」

「またイメチェンかい？」

「いやこれは言いたかっただけ」

「まあ……僕には関係ないね

それより僕の台詞で死よりも速いつて何だい？」

「つえ？

……ああ書いてみたかったただだよ！！！！」

「それだけかい？」

「いやもう1つ理由がある」

「？

どんな？」

「人は……いや動物もだね

脆く直ぐに死ぬ……僕はそれは何よりも速く……誰でも止められな  
いと思うんだ……」

「何か深いような深くないような感じだね」

「まあ良いんだよ

それでは次回もよろしくね？」

「またね」

## 死の神アラン（前書き）

「ヤッホー!!」

みんな元気にしてたかな？魁斗だよ～～～!!」

「…………アランだよ」

「アラン元気が無いよ!!!もつと元気よ」「うるさいよ…………」「ま……まあ偶には元気が無い時もあるよね？」

つと話がずれた…………今回の話はアランの修行&ゼウスの秘密?つてかみんな絶句する秘密&新しいキャラクター3人登場です!!!!!!」

「結構

沢山あるね」

「書いていたら書きたい内容が増えてね!!」

まあアランの修行は短いけどね…………

取りあえず本編出発!!!!!!」

## 死の神アラン

「ふぁよく寝た

……うん？どこだい此処は？」

アランが目を覚ました場所は右は真っ白な空間で左が真っ黒な空間で後ろと自分が立っている場所は灰色だった

そして真っ白な空間には見覚えのある人物がいてその人物を見た瞬間冷めた目をして

奇術師【マジシャン】と暗器術師【ブラックマスター】を発動して黒白のボックスと黒白の指輪を取り出して指輪に黒白の炎を灯す

「また君かい？ゼウス

次はなんだい？またミスとかなら今すぐ君をかみ殺すよ？」  
それを聞いたゼウスは汗を流しながら

「ちょ…ちょっと待ってくれ！？いやマジで待って！！！！君のその武器まじで滅茶苦茶だから！！！！

特に槍の能力が……！！！！

なに能力関係無く殺せるかって……！！！！それなら不老不死である俺でも死ぬから……！！！！

ってか自分にあつた能力を持つ武器って言う願いで何故そんな武器が出て来た！！！！ぶっちゃけそれだけで世界の二つや二つぐらい手に入れられるだろうが！！！！！！！！」

何故か途中でキレルゼウス……まあ一理はあるけど……作者より

「話聞くから早く言いなよ」

炎を消しているアラン

「お前がいきなりボックスとリングを取るからだろうが……」

「……早く言わないとかみ殺すよ？」

再びリングに炎を灯すアラン

「はい言わせて頂きます!!!!!!」

今回アランを呼んだのはアランの神としての能力を完璧に扱って貰うためです!!!!!!」

「？」

完成【ジ・エンド】で十二分に出来るんじゃないの？」

「完成【ジ・エンド】にも限界があるわよ？」

いきなりゼウス以外の声が真つ黒な空間からしたのでそちらを見たら白髪で黒眼の女性がいた

「誰だい君？」

「私？」

私は神……名前は天照大神」

「君が……もう1人の最高神か……」

「私もあなたの事は知っているわ

ゼウスとか他の神が始めた暇つぶしの転生者でありながら神に成った少年……しかも最高神と言う今まで2人しか居なかった席につい

たつて……

神界、天界、地獄、地底では有名よ？アラン……いえ阿濡美須王汰那斗簾神【アヌビスオウタナトスガミ】と呼んだ方が良いかしら？」

「好きな方で構わないよ」

「そう？」

ならアランと呼ばせて貰うわ

私も天照大神ではなくアテムって呼んで

私の真名よ」

「真名？」

なんだいそれ」

「あら？ゼウスから聞いてないの？」

「……聞いてないよ」

「そう……真名を教える前に神には位があるのよ

下から順に見習い神、下つ端神、新人神、下級神、中級神、土地神、

悪神、善神、上級神、最上級神、そして私達最高神とあるわ

そして中級神に成ると神としての名前を頂ける訳なのよ

真名はそれまで名乗っていた名前ってわけよ」

「？」

僕は前世と現世では名前が違うよ？それならどうなるんだい？」

前世の名前に成るんだつたら……イヤだね

「神に成った時に名乗っていた名前だからアランになるわ」

良かった……

「分かったよ……」

それで？さつきから気になってただけど何故黒色、灰色の空間が増えたんだ？」

「これはさつき言った神位が土地神に成った時にそのものの空間をあげるのよ

ゼウスの場合創り私の場合炎

つまり創る者と壊すもの対に成ってるから白と黒の空間……そして今君が立っている空間はあなたの空間よ」

「そう言うこと……」

つまり死〓灰色ってイメージ何だね」

「それだけじゃ無いわよ？」

「？」

どう言う事だい？」

「さつきも言ったけど創る者〓白

壊すもの〓黒なの」

「……つまり

僕が貰った能力始まりの能力と終焉の能力も関係してるわけだね」

「そう言う事よ」

白と黒を混ぜたら灰色ぽいもんね……

「それで？」

僕の能力を完璧に扱っ為にどうすれば良いんだい？」

「簡単だよ

君には今からアルところに行って貰う

そこで100000万年居るだけで良い

その中で何をしようと構わない

……ああそれから時間の事は気にしないでね現世の世界の時間は止めてるからね」

「へえ……」

なら心おきなく好きにさせて貰うよ」

「そう……」

なら後ろの扉に入って行って」

アテムがそう言っといきなり後ろから扉が出てくる

「じゃあ

行っってくるよ」

「行っつてらっしやい」

アランは戸惑わずに扉を開けて中に入っつていった……

「あれ？」

俺……空気？」

等とゼウスが呟いたり呟かなかつたり……





気分転換でゼウスに訪ねる

「っな!？」

お…お前それは言わない約束だろうが!？」

「はぁ……あなた最高神だから男って考え古いわよ……変化までして……そんなの解きなさい」

私がそう言つとゼウスの体が光みるみる小さく成っていく

「た…確かに古いかも知れないけど……」

「はぁ自覚してるなら辞めなさいよ……」

それにあなた……アランに惚れたでしょ?」

「な…なな何言ってるの// //!!!!!!」

「知ってるんだからあなたが何時もアランの事を見ながら」「ご主人様……// //」「つて言いながらオナ」「それ以上はダメ~~~~~」  
「!!!!!!// // //」「……」  
「やっぱり好きなのね」

「うう~~~~」

そうだよ……好きだよ

アランが転生してから今まで興味方位で見てたらどんどん好きに成つたよ……」

「他の神がミスしてアランの世界に転生者を送ったのを自分がしたようにしてアランに会ったり

アランにお仕置きされたりしてる時頬赤かったものね（変化のした

で……）」

「う……うう……／＼／＼／」

こんなやりとりをしていると扉が開いた（扉の中の時間は一秒で10000万年であるからもう出て来てても可笑しくありません）扉から出て来たのはボロボロな黒い翼を生やしてボロボロな黒い剣を持ち目が黒と白に成っているアランだった

「ゾクツ……！！！」

な……なななに？

アラン君を見ただけで自分が殺される感じがした……

「？」

ああ……君ゼウスかい？」

アランはゼウス（女）を見つめながらいう

ああ……ゼウス変化解してる状態だもんね

因みにアランに見つめられているので当然……

「／／／／」

真っ赤だった

「取りあえずあの扉で1000000万年耐えたよ？  
次は何をすれば良いんだい？」

剣を空間？に仕舞いこんで眼も白黒から何時もの青色に変わっていた

「っえ？……ああ

そ…そうね……なら天使召還でもしましょうか」

「？」

天使……召還？」

首を傾げながら

「ああ……知らなかったわね

天使召還とは上級神から許されるんだけどね……自分の相棒？パートナーいえ  
使い魔？……みたいなのを召還するのよ」

「何故天使召還って言うんだい？」

「今まで召還されたのが天使だったからよ」

「へえ……」

面白そうだね……どうすれば良いんだい？」

「まずは六芒星をイメージして」

「……………」

アランは目を閉じ耳に集中するようにした

「次は指で六芒星を書いて」

アランは言われた通りに空気に六芒星を描く

するとアランの眼前に半分黒と半分白の六芒星が出て来た  
それにビククリしながら説明を続けるアテム

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

S i d o アラン

アテムに言われて天使召還？って言うのを今はしている所だよ  
それにしてもゼウスが女だったのは驚いたね  
……次からかみ殺す時は手加減した方が良いかな？

アランは普通の際は子供や女性には優しいですが自分の信念を貫  
く為には容赦はしません

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

そう言われ自分の心に聞こえる言葉を口にだす

「我始まりと終焉なり

我死を司る神なり

我の呼ぶ声がしたら駆け寄れ

我の叫ぶ声がしたら駆けつけろ

汝の体は我が矛に……汝の魂は我が盾に……」

そこまで言ったら六芒星が強く光アランもゆっくり眼をあげる

「私の命に従い現れよ……！！！」

ピカッ！！！！！！

最後の言葉を言った瞬間六芒星から今までの光より更に眩しく輝いた  
流石のアラン達でも眩しいので目を閉じた  
光が止むと目を開けた

そして六芒星があった場所には真っ黒なアランと違って綺麗な真っ  
黒な翼と対面的な真っ白な翼を持った女性（少女？）がいた

「ルシファー」

主の命に従い召還されました」

「ラファエル

主の命に従い召還されました」

上が黒い翼の持ち主で下が白い翼の持ち主である

「我が命

主と共に……」

2人はアランに片膝をついて誓うように言う

「今……契約が成された」

自然と動く口にビックリするアラン

契約が完了したらルシファーとラファエルは立ち上がり

「ルッシー……」

良かったね……！……また一緒に居られるよ……！……！……」

「なんでラファエルが居るのよ……！……っちょ……抱きつかないで……

……！……！

あ……主……助けて……」

「ルツシー！！！！！」

先程の威厳が全く無くなった2人にどうすれば良いのか分からない  
アランは取りあえずラファエル？つとと言う天使を落ち着かせる事に  
した

「ねえ

僕の話聞いて「ルツシールツシー！！！！」「だ……だから抱きつかない  
いでつて！！！！」……僕のはな「だつてだつて！！！！嬉しいだもん  
！！ルツシーは私と一緒に嬉しくない？」「嬉しくない……わけな  
いじゃない……」「やった「ねえいい加減話聞いてくれないなら召  
還破棄してかみ殺すよ……？」

神としての能力を発動するアラン

さっきも言いましたが普段は女子供には優しいですがムカついた  
り自分の信念を貫く時には容赦しません

数分後……

「君達……僕に召還されたんだよね……？」

「「はい……」」

ルシファーとラファエルに正座をさせて説教？教育？をしているア  
ラン

「なのに

なんで召還者の前でいきなりなれ合っんだい？

先ずは僕に自分の名前と能力等を教えるのが先じゃないか？  
それに主である僕の言葉を遮るなんて……君達本当に使い魔なのか  
い？」

「そ…それはラファエルが……」

「わ…私だけのせいにしてよ……！！！！！！」

「な…何よ！！」

始まりは「うるさいよ？2人共黙ろっね？」

「は…は…はいいい！！！！！！」

暴れ出しそうな2人を殺気をだして抑えた後……  
数分後……

「反省したかい？」

2人に問うアラン

「はい……」

元気のない2人

「はあ」

そんな2人を見てため息を吐くアラン

「反省したならもう良いよ……  
けど次からは気をつけてね？」

少し笑いながら2人の頭を撫でながら言う  
そんなアランを見て……

「主さまあ／＼／＼」

顔を赤らめながらアランを見る

（私達の主……

格好良すぎます／＼／

絶対惚れてしまいます／＼／）

因みにゼウスとアテムは……

（格好良いよ〜〜

アラン／＼／＼）

（や…やばいわね

ゼウスだけじゃなくて……私まで惚れるなんて／＼／

被害を受けてた

「じゃあ

君達は僕が呼んだら来てね

呼ばない時は僕の空間で好きにしている構わないよ」

「はい……」

頭から手を離して言うとは何か元気が無い2人

( (主様と離れ離れ……) )

「？」

「じゃあ僕は行くよアテムにゼウス」

「っえ？」

「あ…うんまたね」

「う…うん」

「また来てねアラン／／／」

「来ても良いけど男の体だったら会いに来ないよ？」

「っえ？」

「な…なら辞めるよ」

「その方が良いよ君アテムと一緒に可愛いんだからね」

「か…可愛い／／／」

「…ツム」

「神2人は顔を赤らめ天使2人は不機嫌になる」

「それじゃあね」

「…また会おうね可愛い天使ちゃん」

最後の最後に天使2人の耳元そう言って現世？現実に戻った

因みにその後数時間は神2人と天使2人は顔を赤らめていたとかい  
なかつたとか……

## 死の神アラン（後書き）

「はい

今回まさかのゼウスが女だった

……書いてた時に「あれ？なんでゼウス男にしたのかな？……うわあ  
くくミスった……いや？これは良く二次元である「実は女だった」  
でいけるか？」っ的な事があり急遽女にしました！！

……ああ因みに天使召還の時に使用した呪文はある漫画二つの呪文  
をアレンジした感じです

それでは次回もお会いしましょう！！！！」

「それにしても……アラン君どうしたんだろ？  
っえ？まだ寝てるの？」

任務！！波の国編（前書き）

「はい！！！！！」

漸く波の国編まで来ました！！！！！」

「ねえ？

編って事は……」

「はい！！！！そうです！！！！！」

今までと違って一話完結ではないです！！！！！！！！！！」

「……大丈夫なの？」

「……多分」

「……」

「と……取りあえずスタート！！！！！！！！！！」

## 任務！！波の国編

最終試験？鈴取り？から二週間たった

因みにアテムに会ったのは一週間半前の事だよ

今僕達第七班と第零班は火影様の部屋にいる

何をしてるか？

理由は目の前にあるよ

「ああ！！」

私の可愛いトラちゃん！！死ぬほど心配したのよ！！！！」

この甲高い声をだしている人は今し方終わった任務の依頼者でこの火の国の大名の妻マダム・しじみ……依頼は迷子（逃げ出した）ペットを見つけて連れてくることで……今は迷子になったペットとの再会に熱い抱擁を交わしているけどね……

ニヤアアアア！！！！

右耳にピンクのリボンを着けた猫【トラ】は御主人様の抱擁に涙を流し悲鳴のような鳴き声を上げていた……ごめんね？忍の世界では冷徹な考えも必要なんだよ……

「ご苦労じゃったな

さて第七班と第零班の次の任務は……

ん……老中様の子どものお守に、畑仕事の手伝い、忍具の手入れと、それから……」

はあ……分かってはいたけど……下忍の任務はつまらないね……まあもうそろそろ飽きてきたしね……駄目でも聞いてみるかな？

「ねえ……」

それ以外の任務って無いのかい？」

「そうだよ!!!」

もうそろそろ私も忍者らしい任務をしたいよ!!!」

ナルトも僕の言葉に続いて言う

火影様は僕とナルトの言葉を聞いて困ったような顔をしている  
周りを見てみるとイルカ先生は止めようとカカシ先生は来たか……  
みたいな顔をサクラはめんどくさそうな顔をサスケとクウロは一理  
あるみたいな顔をしていた

(もうそろそろ駄々をこねるとは思ってたけど……)

(……彼奴等にしたら良いことを言うな)

(なにめんどくさい事を言ってるのよ!!!)

(私もそろそろ草ムキとか以外の任務を受けたい!!!)

アランの推測は当たっていた

「ナルト、アランお前はまだ新米なんだ  
ちゃんと下済みを積まないといけないの  
サクラ、サスケお前たちも聞いてなさいよ  
そもそも……」

確かにね……下忍の任務はそうなんだけど……それでも忍者なんだ  
から……もうそろそろ気の入る任務をしたいよ

最近転生者とばかり闘ったり修行したりとそんなのばっかだったからね

「イルカ先生

僕ももう弱くないよもっともっと強くりたいんだよ

この気持ちに嘘はないし半端な気持ちで言ってる訳じゃでもないよ

僕の言葉にため息を吐きながら「仕方ない奴だな」っと少し笑いながら言うイルカ先生

「うっむむ」

「火影様

こいつの思いは真剣なモノです

生半可な気持ちで言ってる訳じゃないですよ

それにそろそろこいつらにも上の任務を受けさせようと思ってましたしね」

カカシ先生が火影様にそう言った

……カカシ先生も偶には良いことを言うね

「カカシ……お主がそう言うならば考えてみようかの……」

「ありがとうございます

火影様」

三代目は一杯ある紙を見る

「そっじゃのう……ならこれでも受けて貰うかの

お主達に受けて貰う依頼難易度はCランク……ある人物の護衛じゃ」

護衛…ね

Cランクでももの足りなさそうだけど子どものお守や畑仕事の手伝い、忍具の手入れとかよりはマシだね

「護衛？それって結構偉い人だったり！！」

……Cランク任務の護衛で偉い人の訳無いじゃないか……はあ

「そう慌てるでない今から紹介する……  
入って来て貰えますかな？」

火影様の言葉を聞いて部屋に入って来たのは片手に酒瓶を持った老人だった

「なんだあ？超ガキばつかじゃね〜かよ  
特にその銀髪お前それ本当に忍者かあ！？」

銀髪……僕の事かい？

……へえなかなか勇氣のある老人だね……

「君……そんなに死にたいのかい？」

ゴゴゴゴ！！！！

「ねえ……アラン

間違っても依頼者を殺さないでよね？」

「分かっているよ？カカシ

僕がそんな幼稚な事をするわけ無いじゃない」

「ならその殺気を沈めてよね」

「……分かったよ」

「わしは橋作りの超名人タズナというもんじゃ

わしが国に帰って橋を完成させるまでの間命を賭けて超護衛してもらうー!!」

うん…こんな事なら畑仕事の手伝いの方が良かったかもね……

「直ぐに出発するそうだから荷造りが終わり次第任務開始だよ」

こうして僕たちは波の国へと向かう事になった

途中暇だけど……なにしようかな？

集合時間に30分も遅れて来たカカシにサクラが痴を言うのも今では見慣れた光景だね

そして里と外を隔てる『あ』『ん』と書かれた門を開けて僕は初めてとなる（本体での）里外への一步を踏み出した

移動中……

移動中暇なので久しぶりにチャクラコントロールの修行をしている  
アランだよ

「ねえ

タズナさんタズナさんの国って【波の国】でしょ？」

何を思ったのかサクラが読めない空気を無理に読もうとしてタズナ

に話しかけた

「……………それがどうした？」

不機嫌な声を出すタズナ

サクラ……………僕はサクラをジト目で見るがサクラは気付かずにタズナに向けていた顔をカカシに向ける

タズナの機嫌を悪くしたのに気付いたのかカカシを話に巻き込んだ

「ねえカカシ先生……………その国にも忍者っているの？」

「いや波の国に忍者はいないよ

だけど大抵の他の国には文化や風習こそ違つが隠れ里が存在し忍者がいる

その中でも【木の葉】【霧】【雲】【砂】【岩】は忍び大国とも呼ばれている

つで里の長が【影】の名を語れるのもその五カ国だけだね

その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者たちなんだよ」

その火影の四代目つて絶対ナルトの父親だよな？

面影あるし昔の写真の髪の毛の色や眼の色なんかも一緒だったからね  
そんな事を考えてふとほかの4人を見るナルトとサスケは「やつぱ  
火影つて凄いな……………」みたいな感じで改めて火影の凄さを実感し  
ていてクウロは興味が無いらしくサクラは「へえ火影様つてスゴイ  
んだあ……………」と感嘆していた  
顔と言葉が一致してないけど……………」

「君達火影様のこと疑っていたでしょ？」

……僕は疑ってないよ？

現に火影様は闘いたい人物の1人だからね

因みにバレたサクラは肩をビクツと震わせていた

「ま、安心しなさい！！」

Cランクの任務で忍者対決なんてするわけないよ」

「じゃあ外国の忍者と接触する危険はないんだ  
はあ良かった」

「もちろんだよ

アハハハ」

タズナの表情がカカシとサクラの談笑を聞いて変わったね……なに  
かあるね……この任務

周りを見てみたらサスケ、クウロ、ナルト、カカシも気付いたみたい  
だけどナルトは微妙かしか気付かず疑問を捨ててサスケとクウロは  
気のせいかな？つと首を傾げていた

カカシは目を細めてタズナを見ていた

……これが下忍と上忍の違い……

ピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャ

……早速来たようだね

整備された土の道に水溜まりがあることは別に疑問に思わないだろ  
うね……普段なら

だけど……ここ数日雨なんて降っていない……しかも今は任務……  
それも護衛任務だよ……

そして

水溜まりからちよつと行つたところで水溜まりから大きな鉤爪を付けた変な二人組が現れた……  
動き辛く無いのかな？  
場に似合わない事を考えていると一番後ろにいたカカシがそいつらの最初の的に成っていた

「なに!？」

カカシが態と負けた……流石上忍だね

これで誰が標的かと僕達の実力……2つの目的が達成できる

まあこんな奴2人なんかじゃ僕の敵にも障害にも成らない……

「ただの的だよ……」

アランは忍具入れからクナイを2本持ち2人に向かって走りだし近づいた時クナイを2本相手の首過ぎにクナイを当て……

「雷遁・雷移しの術」

雷遁・雷移しとは相手に触れる又は武器で触れた場合に使える相手に静電気をおこして戦闘不能にできる

「……カカシ

もう出て来て良いんじゃないの？」

「……何時から気づいていたの？」

「さあ？」

何時からだと思う?」

「はあ

まあ良いわー応合格ね

…… 1人しか分からなかったけどね」

僕以外の人物はいきなり過ぎて反応出来なかったらしく暫く固まっていたよ

数分後……

「先生さつきと話が違っじゃない!!  
忍者との接触はないって言ったの私覚えてるんだから!!!!!!」

全く…… 五月蠅いね

任務にトラブルはつき物何時何時何が起こるか分からない…… 例えCランク任務でもね……

「それは私も聞きたいわ  
タズナさん」

「……

な……何じゃ?」

カカシはタズナの目をジッと見て……

「ちょっとお話があります」

嘘はつけない…… いやつかせない

ついた瞬間…… どうなるか分かるからね

数分後……

はあ……カカシ長いね

何度も何度もチャクラをあっちこっちに集中させる修行も飽きてきたね

……あ

右足が23%、左足に8%、右手に12%、左手に17%、胴体に28%、顔に12%と……はあ漸く来たようだね

「こいつらは霧隠れの中忍つてとこか……」

いかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だよ」

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは真剣にカカシの言葉を聞いている  
僕？僕も一応聞いているよ？……っあ右手に1%行き過ぎた……

「何故

俺達の動きを見切れた？」

……ん？

なに言ってるの？クウロ

嘘だよな？

「数日雨も降っていない今日みたいな晴れの日の水溜まりなんて無いでしょ？普通」

4人はっあ！！って顔を……ってナルトにサスケも分からなかったんだね……はあ大丈夫かな？この班……

「あんたそれ知ってて何でガキにやらせた？」

タズナの疑問も当たり前前だね……僕達がやられる＝護衛されている  
自分の命だからね

忍なら絶対やらない事だしね

……でもねそれをしてもらわなきゃいけない事があるんだよ

「私はその気になればこいつくらい瞬殺できます  
ですが知る必要があったのですよ  
この敵のターゲットが誰であるのかをね」

そう……あんな事までして知らなくちゃいけないのはこの事……  
C  
ランク任務に他里の忍が出てくる筈がないからね……普通は……ね

「我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていません  
依頼内容はギャングや盗賊などただの武装集団からの護衛だった筈  
です

忍者が襲ってくるとなるとBランク以上の任務です  
依頼は橋を作るまでの支援・護衛という名目だった筈です  
敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定された筈  
何か訳ありみたいですが依頼で嘘をつかれると困ります  
これだと我々の任務外ってことになりますね」

「僕達忍者にとって一番大事なのは情報……一つでも情報と違う部  
分があつたら……最悪命にも関わるからね……」

「……先生さんよ話したいことがある  
依頼の内容についてじゃ」

僕の言葉を聞いた後タズナは力カシに話だした

……真実をね

「あなたの言う通りおそらくこの仕事はあんたらの任務外じゃろう  
実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている」

「超恐ろしい男……………ですか

……………誰です？」

「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃろう  
海運会社の大富豪……………ガトーという男だ！！」

……………一応僕も影分身で波の国や様々な国に行ったけど……………聞いた事  
ないね

「あのガトーカンパニーの……………！！！！  
世界有数の大金持ちと言われる……………」

……………そんなに凄いの？

ん？ガトー？？ガトー……………ガトー……………ガトー……………ああ！！思い出し  
たよ

確か僕が四歳の時の影分身でガトーカンパニーって集団の半分を殺  
した事があつたね……………ああ弱すぎて忘れてたよ……………

「そう……………表向きは海運会社として活動しとるが裏ではギャング  
や忍を使い麻薬や禁制品の密売……………果ては企業や国の乗っ取りとい  
った悪どい商売を生業としている男じゃ

一年ほど前じゃ……………そんな奴が波の国に目をつけたのは財力と暴  
力をタテに入り込んできた奴はあつという間に島の全ての海上交通・  
運搬を牛耳ってしまったのじゃ……………！！！！島国国家の要である交通を  
独占し今や富の全てを独占するガトー…………………………そんなガトーが唯一  
恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ……………！！！！」

へえ……そんなに凄い集団だったんだね  
知らなかったよ……

「……なるほど」

つで橋を作ってるおじさんが邪魔になつたつてわけね

っ！……じゃあその忍者たちはガトーの手の者つてこと！？」

……君頭良いつて嘘でしょ？話聞いて襲つてきたその2人がガトー  
カンパニー？だっけ？からの刺客じゃなかったらなんなんだい？話  
聞いてた？

「……波の国は超貧しい国での……大名ですら金を持ってない。  
勿論わしらにもそんな金は無い。高額なBランク以上の依頼をする  
ような……な」

そうなんだ……

色んな国があるんだね

「すみませんが」

この任務はなか「ちよつと待つてよ」「っ！……アラン？」

「タズナ……悪いけど呼び捨てで呼ばせて貰うよ？」

あんたが嘘をついた事は悪だよ

僕達木の葉の里の忍者に対する侮辱だよ？それを分かっててしたの  
かい？」

「……ああ」

「……そう」

ならこの任務……………僕は受けるよ」

「っえ?!」

タズナがビツクリして俯いていた顔を上げる

「アラン!?」

「タズナ……………あんたは悪……………でもね自分の守りたい者のために悪に成ったあんたを少なくとも僕は絶賛するよ……………それに僕任務を途中で放り出して逃げるような忍者には成りたくないんだよ……………逃げたらもう二度と……………僕の信念を貫けないからね」

「な……なによ!!」

信念のために死ぬわけあんた!!…馬鹿じゃないの!!…!!…私は絶対  
対いかなからね!!…!!…!!」

サクラが僕に向かって叫んだ

「別に良いよ

さっきも言ったけどこの任務を受けるのは木の葉でもこの第七班と  
第零班でもないよ……………僕青葉アランが個人的に受けるだけだよ

……………それに」

ニヤッと笑って……………

「僕は死ぬつもりはないよ?」

任務！！波の国編（後書き）

「やあ読者のみんな！！」

毎回毎回NARUTO（転生と始まりと終焉）を見てくれてありがとう！！！！

それから白が出てくると思った読者残念！！！！

……今回もあとがきにアラン君が居ないから寂しいけど頑張ります！！！！！！

今回はアランの信念を書きました

他の小説じゃあ絶対に無いような感じを書きたいと思っていたらこんな形に……でも信念を貫くアランの姿に僕も痺れた！！！！信念を貫く主人公って格好いいですよね！！！！

……それではまた次回お会いしましょう！！！！！！

任務！！波の国編2（前書き）

「今回こそは桃地さん達が出ると思いますよ！……！」

「思うだけかい？」

「いや……出るよ……絶対でるよ……！」

## 任務！！波の国編2

あれから波の国にタズナと向かってるんだけど……

「ねえ

なんで君達も来てるんだい？」

「君だけで行かせれないでしょ？」

「「アランが行くなら私も行くよ！！！」」

「別に良いでしょ！！！！！」

「フン……」

……クウロ「フン……」って答えに成ってないよ……？

「まあ別に構わないけど僕の邪魔だけはしないでよね」

数分後……

「ヒツヒツフーヒツヒツフー」

今僕はクウロと一緒に視界を遮るくらい濃い霧が発生している大きな川を小船に乗って渡っている最中だよ

周りを見てもみるけどホントに何にも見えないね

……まあ僕には関係無いんだけどね……

因みにヒツヒツフーとは舟漕ぐ時に発する言葉なんだって……

妊婦じゃないけどね……はあ  
最近ため息が増えたような気がするよ……

取りあえず陸に着いたよ

クウロが隣で「ハアハア」言ってるのが凄く憂鬱だけどね……僕は  
って？僕は大丈夫だよ体力的にも精神的にもね

……ん？僕は誰と話しているんだろ？

「護衛頼むぞ！！」

ガハハハハ！！！！」

はあ……帰って寝たいよ

歩いていると僕の感知……円に知らないチャクラが掛かった

円とはハンターハンターで出てくる技です

カカシに言った方が良いのかな？  
いや……まだ敵とは限ってないね……

「それにしても遠いですね  
まだ町は遠いんですかタズナさん？」

「もう少し行けば見えてくるじやろう  
町に着いたらわしの家で休んでいけばいい！！  
疲れが取れなかったら、一晩でも二晩でも休んで行っていいぞ！！  
！！

ガハハハハ」

……僕は速攻で任務を終わらせて帰って寝たい気分だ……！！！！

!!

「皆伏せろ!!!!!!」

「『『『『『!!!!!!』』』』』」

ナルト、サスケ、クウロ、カカシは僕の言葉に従って伏せた  
タズナは僕が頭を掴んで無理やり伏させた

ビュンビュン

そんな音を出しながら大きな塊が飛んできて木に刺さった  
そして大きな刀の上に忍者?の男が立っていた

「へえ」

これはこれは霧隠れの上忍桃地再不斬君じゃない」

カカシは軽口を言いながら立ち上がる

軽口を言ってるけど……凄く警戒してるね

……それだけヤバい相手なんだね

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは相手の殺気に当てられて震えて  
いる

……僕も震える経験をしたなあ……3歳半位の時にね……確か相手  
は蛇人間だったかな?

まあ今はもう馴れたけどね

「お前等下つてなさい

こいつはさっきの奴らとは桁が違う……こいつが相手だと私もこの  
ままじゃちょっとキツイかな……?」

カカシが隠している方の額宛を掴む

「写輪眼のカカシか……」

悪いがお前に用はない

そこのじじいを渡してもらおうか」

「お前達タズナさんを囲って守ってなさい

それからアランお前がさつきからウズウズしているのは分かっているがこればかりはお前にはまだ早い

ここは私に任せておけ」

「……仕方ないね

今回だけは譲ってあげるよ」

「再不斬

まずは私と戦え」

「……渡す気はないようだな

だが噂の写輪眼を見れるなら幸運だと思っておくか……」

相手はニヤツと殺気を出しながら言うからサクラが失禁しそうだよ

……

そしてカカシが額宛を上にはずらして左眼を開ける

……へえカカシって写輪眼使えるんだね……

そして後ろではクウロがサクラにサスケがナルトに写輪眼を説明している

……サスケにクウロ君達仲悪すぎでしょ

ほらサクラとナルトが場違いに苦笑いしてるじゃない……

「お話はこれくらいでいいか  
俺はさっさとそのじじいを殺らなくちゃなんねえからよ」

相手は木に刺さった剣を抜いて木から飛び降りる

川の上に飛び降りると瞬時に印を結び【霧隠れの術】を使って視界が見えなく成った

……まあ僕には関係ないけどね……

「あいつがまず最初に狙うのは私だろう

だが桃地再不斬

こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術の達人として知られた男だよ気がついたらあの世だったなんてことになりかねない……私も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない……！  
お前たちも気を抜くな……！！！！」

いや……必ずも力カシを狙って来るってわけが無いね……

『八か所だ……』

……馬鹿なの？

無音殺人術なら喋ったら駄目じゃない  
なに？下忍だからって舐めてるのかい？

忍者なら【無情になれ、殺す時は躊躇するな、相手が誰でも油断はするな】だよ……

『咽喉・脊柱・頸動脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓

……さて、どの急所がいい？くくくくく』

殺人宣言かい？

律儀だね……何も言わずに来たら一瞬で殺せたかも知れないのにね

……

「クウロ

安心しろお前達は私が死んでも守ってやるから」

……死んだら守れないのにね

それよりクウロの名前を出すって……シヨタかい？カカシ

シリアスな空気が崩れた瞬間だった……

それからカカシはクウロに気はありませんから

「私の仲間は絶対に殺させやしないから」

はあ……相手も何律儀に待つんだらう？

案外忍者って馬鹿なのかい？

はあ……本当帰って寝たいよ……

『それは

どうか……』

カカシが斜めに斬り裂かれる

……流石は上忍……

「終わりだ

カカシ……なにっ！！！！」

あの一瞬で水分身をするとはね……

斬られたカカシはバシャツという音を出して水になって辺りに飛び散る

それを見た桃地は動きを止めて自分の首に突き付けられたクナイを横目で見る

「水分身の術だと……まさか霧隠れの術の時には既にコピーしてたつてのか!!!!!!」

「動くな……これで終わりだよ」

「さっすがカカシ先生!!!!!!」

私先生ならやってくれるって信じてた!!!!!!」

あからさまな嘘だね……

それからカカシ……警戒無さ過ぎそんだと……

「ククク

終わりだと?

分かってねえなカカシ猿真似如きじゃあこの俺様は倒せない

絶対にな!!!!!!

しかしやるじゃねえか

分身の方にいかにもらしい台詞を喋らせることで俺の注意を完全にそっちに引きつけ本体はその藪の中に隠れて俺の動きを窺っていたって寸法か……」

桃地がカカシの事を絶賛するが僕なら隠れてる方も分身にするね……

「けどな……俺もそう甘かねえんだよ!!!!!!」

カカシと一緒に水に成って消えた本体はカカシの後ろに回って切り

かかるが……

ドゴンっ！……！！

「っな！……！！」

「君……：僕の事忘れてないかい？」

僕が先に蹴り飛ばした

「カカシは休んでなよ

此処は僕がやらせて貰う」

カカシの前に出てそう言う

「な……なに馬鹿な事言ってるのあんた！……！！私達にあんな化け物に勝て「僕を君程度と一緒にしないでよね」っ！……！！」

僕はサクラに向かって殺気を飛ばす

信念も何もない君なんかには言われたくないよ……

「さて……：行くよ？」

僕は右手の親指を噛み左手に横に線を引き印を結んだ

「口寄せ……：白月」

左手から煙が立ち煙が晴れると白い竿に入った刀が現れる

「抜刀術……：白瞬！……！！」

一気に桃地に近づき瞬速の速さで刀身を抜く

キンっ！！！！！！

「っ！！！！！！」

「へえ……」

白瞬を防ぐんだね……なら一刀流……速さの型……白速……！！！！！！」

刀をまた瞬速の速さで振るっ

「ッグ……！！！！！！」

刀を避けようとするが掠り傷が頬をに出る

「まだまだ

一刀流……攻撃の型……白龍！！！！！！」

避けた桃地の首に向かって突きを放つ

キン！！！！！！

「ガハッ！！！！！！」

剣で防いだ桃地だがあまりの衝撃で剣を飛ばされる

「終わりだ……」

「ハアハア

な…何モンだテメエ」

「お前の死神さ……一刀流……連続の型……はく」

ザクザク！！！！！

アランが攻撃を仕掛けようとしたら桃地の首に細い何かが刺さる

「フフッ

本当に死んじゃった」

どうやら霧隠れの暗部らしく桃地を回収しに来たらしい

一応カカシが桃地の生死を確認して暗部が桃地を連れて行く……前に僕が桃地に触れた

異常……目印【ペイント】発動……発動完了……

僕が目印【ペイント】を桃地にかけていたら近づいてきた暗部が口を開いて……

「？」

何です？」

僕に質問してきたよ

「ん？ああ

何でもないよ……気にしないで良いよ」

「そうですか

それでは僕はこれで……」

そう言っつて桃地を担いでどこかに行った

僕達が桃地を担いで去っていくのを見ていと……

バタツ

後ろで突然カカシが倒れた

「だ……大丈夫ですか！！！！！」

サクラがカカシに駆け寄り大丈夫かを聞いた

「ああ……うん

大丈夫よ……ただ写輪眼の使いすぎで倒れただけだから」……これ  
がうちは一族が使うのとうちは一族以外が使う違い……か  
はあ……仕方ないね

僕はカカシに近づき持ち上げる

「キヤア！！！！！」

「カカシは僕が連れて行くから速く行くよ」

「つちよ……ちよつと！！！！！」

「五月蠅いよ

歩けない人は黙っててね」

「うつ……あ……ああ／／／／」

何故か顔を赤くするカカシ……何故？  
それから睨んでくるサスケにナルト

……何かしたかい？僕

s i d o カカシ

同僚の皆も言ってたけど

アランってやっぱり格好いいわね

……って何を考えているんだ私は！！！！／／／／  
でもやっぱり格好いいなあ～～／／／／

カカシをも虜にするアランであった

s i d o ナルト

なんでアランってあんなにフラグたてるだっけばね……しかも鈍感だし

私の気持ちも分からないっけばね

こうなったら直接言った方がいいのかな？

………（想像中）

む…むむ無理だっけばね！！！！

って何時の間にか口調を可笑しく成ってた！！！！！！

でも昔アランにこの話方をつい言ったら「？可愛いよ？」って言うてくれたから私的には気に入ってるてばね……

って何言ってるてばね私／／／／

s i d o サスケ

アラン……またなのね

しかも教……いえアカデミー時代から教師も虜にしてたわね……

でも任務を続行する時のアランや戦ってる時のアラン……格好良か

つたなあ〜…… / / / /

駄目だ思い出したら顔が赤くなってきた / / / /

s i d o アラン

？

何故かナルト、サスケ、カカシが何か険しく成ったり顔を赤くしたりしている……何かあったのかな？

当の本人は全く気づかないと言う……全く鈍感なアランだった

ん？何かムカつく声が聞こえたような？気のせいかな……？

恋愛以外は鋭いアラン

……なんで恋愛は鈍いんだろ？主人公だからかな？  
はあ全く難儀な主人公だよ……

やっぱりムカつく声が聞こえるよね……？

誰だ話しているのは……でも気配は無いしやっぱり気のせいだね

任務！！波の国編2（後書き）

「ほらね

出たでしょ？」

「それより

最後の何だい？」

「つえ？

……ああ……あれは時間稼ぎならぬ文字稼ぎかな……ってアラン！！  
！！！！」

「そんな事だと思つたよ……君に地獄を見せてあげるよ」

「ギヤアアア！！久しぶりのこんな流れ……！！！！！！」

「こんな作者の小説だけどこれからもよろしくね？」

任務！！波の国編3（前書き）

久々のNARUTO〜転生と始まりと終焉〜更新しました！！！！！！  
グダグダ過ぎますので温かい目で見てください

### 任務！！波の国編3

あれからカカシを抱えてタズナの家にやってきた……

「もしかしたら……」

桃地は生きてるかもしれない……」

カカシが突然発した言葉にサクラ、サスケ、ナルト、クウロは「っ  
え……？」って顔をした

それからカカシがああ暗部が使っていたクナイの確か……千本だった  
かな？を説明した

そしてなんやかんやあつて修行する事に……

っえ……？なんやかんやつて何だつて……？

なんやかんやはなんやかんやだよ

30分探○でもそう言つてたよ？

うん……？30分○偵つて何だろうね……？

まあ……良いや……

ああ……修行内容は木登りだよ……手でではなく足でのね……

今カカシが木登り修行の意味とやり方を説明している

……ナルト……チャクラの事ぐらい覚えところよ……

「じゃあ

やってみようか」

サクラ、サスケ、ナルト、クウロ、僕は足にチャクラを込めて木を  
登り（走り？）始めた

一番始めに落ちたのはナルト次に落ちたのはサスケとクウロ

サクラはチャクラコントロール‘だけ’は良いのか木の上で座つて  
いる

僕……？片足でてっぺんまで登ったよ？

当たり前じゃないか

僕は……と前からチャクラコントロールの修行をしてるんだよ？

上手く無かったら泣いてるよ

（サスケ、ナルト、クウロは予想どおり……）

サクラもチャクラコントロールは上手だから予想どおりね……だけどアランにはビックリしたわね……

出来るとは思ってたけど……予想以上ね（

「あれ？

名門のうちは一族……しかも今年ナンバー2のうちはの天才と言われているうちはクウロ君は女の子に負けるのかな？」

「……くそっ」

（先生……！！！！）

何よけい事言っつてクウロ君を苛めるのよ……！！！！（

「それに……！！」

クウロ君はナンバー2じゃなくてナンバー1よ……！！！！

そこにいるアランが勝てたのは偶々……ってかクウロ君が手加減したからよ……！！！！」

ピクッ……

「「何言っつてんのよ（てばね）……！！！！」

アランが一番に決まってるじゃない（てばね）……！！！！」

はあ……

カカシの挑発に乗るのか……まあ確かにあの弱者にそう言われるのは苛立つけどね……

アランは相手の力量によって呼び名が変わります

下からゴミ、クズ、ヘタラ、弱者、草食動物、馬鹿、阿呆、肉食動物、強者の順です

因みに上の呼び名を使うときは使う相手に苛立つ時に使います  
それ以外は基本呼び捨てです

「ハイハイ

落ち着く落ち着く……」

……カカシ……君が挑発するからだよ……

まあこいつ等も過激に反応したのも悪かったんだけどね……

「取りあえず

アランとサクラは自由にしといて良いわ

ナルト、クウロ、サスケは引き続き木登り修行をしてなさい」

カカシはそう言うてからタズナの家に戻っていった

僕は影分身を作って（一体）この場に残してナルト達から離れる

sidooアラン（影分身）

本体が離れていくのを見て姿が見えなくなった所で視線をナルト達に向ける……

ナルトはチャクラ量が多くで上手く扱えないようだね……サスケもチャクラ量が多いけどナルトより少ないしナルトよりチャクラコントロールが上手いから少しずつ上達してきた

クウロはって……？

興味ないよ

そんな事を考えていたらクウロがサクラにコツを聞いていた  
それを見たサスケとナルトは僕の方にやってきた

「ねえ

アランコツとかってないの？」

「ん？

……まああるかな？」

「「な…なら教えて！……！！」」

ん〜……

まあ暇つぶしにはなるかな？

「分かったよ

教えてあげる」

「「や………やったああ……！！！！」」

喜ぶのは出来てからにしなよ……

s i d o アラン（本体）

さて……と

漸くあいつらから離れられたな……

先ずは……異常発動……目印【ペイント】発動……よし上手くいっ  
たね……次に腑罪証明【アライブロック】発動！！

異常説明

目印【ペイント】

発動方法は相手に触れて頭の中で目印【ペイント】発動と言う事  
後から目印【ペイント】発動と言った場合触れた相手の位置が分かる  
複数居た場合は思い浮かべた者の位置が分かる

ふう……

偶々創っていた目印【ペイント】が役にたつとはね……人生何があるか分からないものだね……

「！！！！！」

君は……」

うん？

ああ……やっぱり

「君はそこに倒れてる……」

いや桃地とはぐるだったんだね……」

「……何時気づいたのですか？」

「何時？」

そうだね……疑問を持ったのは初めっからだよ」

「……なぜ？」

自慢ではないけどなかなか上手く暗部のフリができたとおもったんですけど……」

「確かに上手かったよ……」

「一つを除いたらね……」

「一つ？」

「何ですか？」

「数だよ数」

「数？」

「桃地ザブザ……」

カカシの話を聞いた限りなら最低でも三人は居るはず……なのに来たのは暗部1人……流石に桃地相手に1人で行かすはずがないよ」

「……もしかしたら

人員が居なかったかも知れないし別々行動をしたかも知れませんか？」

「確かに……それは有るかも知れないな

だから一旦逃がした……印をつけてね……」

「泳がしたんですね？」

そう……俺の推理は所詮空論

確かな証拠がない

例え桃地を逃がさずに異議を唱えたとしても今のようにかわされるのみ

無理やりという選択もあったけどもし僕の推理が間違っていて本物の暗部なら戦争が起きる……

だから逃がした‘フリ’をした

逃がした後に目印【ペイント】で居場所をつかむために  
ちゃんと霧の国に向かっていたなら本物

霧の国に向かっているなら偽物……

「凄いね君

そんな年で……でも1人で来たのが……ミスだったね!!!!!!」

相手は一気に俺に近づいて攻撃してきたが……

「木遁・木縛り」

先に印を結び木で相手を捕らえる

「まあ

そんなにいきりたつな

別に殺しに来た訳じゃないよ」

そうだ

僕は別に桃地を殺しにきたわけでもまして偽物を殺しに来たわけでもない

「じゃあ……

なにしに……??」

「君達

ガトー………だつたけ?

に雇われてるんでしょ?」

「……ええ」

「だつたら……

君達を僕が雇う」

「……つえ？」

「対価は命と自由……まあ自由と言っても木の葉の中ってのと僕の意志によるけど……不自由ない自由ぐらいはあるよ  
あとは……生活に困らないお金と生活場所を与えるよ」

「……内容は？」

「内容は戦闘……」

もつと言えば僕が戦って欲しい時に戦って貰っただけだよ」

「……分かりました

良いでしょう……だけどザブザさんはどうするつもりですか？」

「どうするつもりもなにも……雇っただけど？」

何を言ってるんだい？

「い……いえ

ザブザさんは色んな意味で有名ですから……」

ああ

そういう事……

「大丈夫だよ

僕の忍術でみんなが犯罪者桃地ザブザとは気づかないようにするからね」

まあ……認識妨害何だけどね……なんなら異常を作れば良いし

大嘘つき【オールフィクション】で無かった事にすれば良いしね

「……なんで

こんなに良くしてくれるんですか？」

「まあ

戦力があるが30%」

まあ……木の葉は平和だからね……良い意味でも悪い意味でもね……

「残りの70%は？」

「？」

友達だからだよ？」

「っえ……??」

「うん？」

まさか忘れたのかい？

白

「っえ？

あ…アラン……なの？」

そう

彼……いや彼女とは知り合い……まあ影分身でだけどね

昔霧の国に行ったときに友達になったんだよ

まあ……目印【ペイント】使うまで気づかなかったけどね

白にも目印【ペイント】を昔つけていた

「あ…アラン君！…！！」

契約成立したと同時に木を解いた  
そしたら白が急に抱きついてきた

「?????」

どうしたんだい??」

「アラン君…アラン君  
会いたかったよ……」

白にあった時に落としてます  
落としかたはナルトの時と一緒にです  
つく！！羨ましい！！！！！！

「なんだこれ……」

桃地さんは目を覚ましてそう言ってたとか言ってたとか……

…

## 任務！！波の国編3（後書き）

最近

五つの炎とこのNARUTO（転生と始まりと終焉）以外の小説を2作品書こうと思うのですが二つのうちの一つのキャラの容姿を悩んでいます  
だからアンケートをしたいと思います！！！！  
下の8つから好きなものを選んで下さい！！！！

? 一護（無月習得時）

? 百哉

? 市丸銀

? 浦原喜助

? ウルキオラ

? グリムジョー

? 日番谷

? 自分で考える！！！！

因みに百哉と日番谷は過去（仮面編）か現在（死神代行消失篇）かを選んでいただくとありがたいです

あれ？百哉はかわりあつたっけ……？まあいつか

ああそれからうちの小説にアランを書きたいと言っ方は言って下さい何時でもアランを貸し出します！！！！！！



## 任務！！波の国編 4

「つまり

てめえが俺達を雇ったって事が……？」

「うん

そんな所だね」

「てめえ

正気か？」

「なにがだい？」

「はあ……

だから俺達を雇うと言うことは俺達を匿うと言う事だぞ？  
そんな危険な橋を自分から渡るなんて……って事だよ」

「ああ……

そんな事」

「お前……

そんな事って……結構重大事じゃねえか」

確かに重大事だね……

一般的にはね

この一般的はNARUTO世界の一般的です

「だけど……

君達を雇った方が楽しそうじゃないか  
危険？構わないよ

僕は僕のしたいようにするだけ……それだけだよ」

「俺達は……人殺しだぞ？それでもか？」

桃地は殺気をだしながらアランに言う

白は黙って成り行きを見守ってる

「はぁ……」

桃地お前は馬鹿なのかい？」

「なに？」

いきなり馬鹿と言われてイラツとする桃地

そんな桃地を無視して話を続けるアラン

「忍の世界で殺しなんて日常茶飯事じゃないか

今の所木の葉は殺しが……温い里になっただけどね……それに……」

そこまで言っけて口を閉じるアラン

「それに……何ですか？」

アラン君」

流石に気になった白がアランに聞く

アランはゆっくり口を開き

「僕の方が君達より沢山殺してるよ」

「「っ！！！！」」

殺気をだしながら言ったアラン

そんなアランの口元は……笑っていた

そんなアランに恐怖を抱いた桃地

「桃地……」

君の問は間違ってるよ

あの言い方……人も殺した事のない人間に言う言葉だよ

ああ……因みに初めて人を殺したのは……二歳の時だよ」

皆さん覚えてるだろうか？

アランの修行方を……何人も影分身を“一緒の空間”で修行する

……と思ってましたか……？

それは違いますよ……アランの修行方は影分身をだして変化の術で木の葉の里から出てその後時空間忍術で様々な時代に行って修行をしていたんだよ

「「……………」」

突然のアランの言葉に声を忘れるぐらい唾然している2人

アランはため息をつき「……仕方ないね」って言ったと思ったら……

「これぐらいで良いかな？

桃地“ちゃん”」

「っな……」

その言い方お前まさか……」

「ククッ  
久しぶりだね」

急に桃地の言い方を変えた  
それに啞然としていた桃地が目を開いた  
アランはそんな桃地を無視して口寄せの術の応用技を使い家にある  
仮面を持って桃地に見せた

「アラク……お前……アラク……なのか？」

「ああ  
アラクだよ」

「!!!!!!  
……そうか……久しぶりだな」

「ああ  
久しぶりだね」

数時間後……

「でも  
まさかアラン君とザブザさんが知り合いだったなんて……」

「ああ  
僕も最初気づかなかつたよ  
まさかあの時の“餓鬼”がここまで成長するなんてね」

「止めてくれねえか？」

その呼び方

しかも今ではお前の方が餓鬼だろうが」

「僕は実力の所を言ってるんだよ？」

それに年齢も（前世と影分身の年齢を足すと）君より上だよ」

「んなわけねえだろ……………」

桃地は呆れながらアラク……………いやアランに言う

「まあ

年齢の所は別にどうでも良いけど実力の方は本心で言ってるよ？」

君は餓鬼……………いや“弱者”だよ」

「……………」

桃地はアランの言葉に反応してアランを睨みつけるがアランはどく吹く風つと言う風に無視をする

白はどうしたらいいのか分からずそわそわしてる

「君は昔より弱いよ」

「どう言う意味だ……………？」

アラク……………いやアラン」

「どう言う意味も……………言葉のまんまだよ

昔教えたよね？どんな相手にも油断しない

例え子供でも……………ね」

「……………」

アランの言葉を聞いた瞬間ピタリッと止まった桃地

「言っただよね？」

覚えてないって言わせないよ？

今回僕たちが来たときに気配を消して殺せば良かった、カカシと喋る前に殺せば良かった、気配消した時何も言わずに殺せば良かった、カカシを狙わずにナズナを初めっから殺せば良かった  
君は油断したんだよね？

相手は下忍……上忍はいるけど子供3人にじいさん1人だ…殺すのも簡単だって思ったんだよね？

しかも額宛から見て木の葉……あんな温い里のしかも下忍が3人もいる……でも君は【負けた】

その生温い木の葉の下忍の僕にね

……まあ君が本気で来ようと僕は勝てたけどね」

「……………」

桃地はアランの言葉を聞いても何も言わずにいた  
白も唯単にアランを見ていた（見惚れていた）

「確かに……」

俺は油断していたのかもな……」

「まあ

分かればいいよ

何時までも同じ話題を言うほどネチツこくないしね僕は……そんな事より白と桃地をこれから木の葉に連れて行こうと思っただけど構わないよね？」

アランは一応確認として桃地と白に訪ねた

「ああ

構わねえよ」

「僕も構いません」

「分かったよ

まあ安心しなよ……一瞬だから

アリバイブロック  
「腑罪証明発動」

アランは2人の体に触れて（白と桃地の肩）そう言った瞬間3人が消えた

.....

「とうとう……ん？」

「「どうしたんだ（ですか？）」「」

アリバイブロック  
「腑罪証明を使用して来た場所は……先程と同じ場所だった

アリバイブロック  
（腑罪証明が発動してない……？）

アリバイブロック  
いや……腑罪証明はちゃんと発動した……なら何が……？）

「分からねーっ顔してやがるな

“アラン”」

アランが考え事をしていると急に上空から声がかかる

アランは上空に目を向けると……真っ赤な目と真っ青な青い髪をし

た少年？がいた

「誰だい……？」

君……」

アランは少し威圧的に訪ねた

「ックク

怖いなあ……やはり“噂”道理だぜ

阿濡美須王汰那斗簾神【アヌビスおうタナトスがみ】……いや転生者殺しってほうが良いか？」

「君……転生者かい？」

威圧……いや凄まじい殺気を青髪の少年？に飛ばすアラン  
相手も相応な殺気をアランに返す  
そんな中アランの殺気に当てたれて動けない白と桃地

（な……！……！

なんだ……！！！！

俺が……この俺がビビってるだど……！？

昔より強く成ったって言うのに……！！！！

クソッ……！！！！）

（な……なんですか？

この殺気は……

今まで様々な敵……それでこそ強敵と言われる人と戦い（殺し合い）  
をしましたが……それが子供の戯れ……いえ赤子の戯れみたいに感  
じる……！！！！）

「へえ  
なかなかやるね……  
でも……勝つのは僕だよ？」

指に（人差し指）つけてる指輪に炎（死ぬ気の炎）を灯してボックスに注入したアラン  
だけど……

「!？」

ボックスは開かなかった

「ククッ

なんで開かない？って顔をしているな

理由は簡単だよ

俺の2つのうちの能力……キャンセル却下の能力だ」

絶句しているアランに顔を歪めて笑いながら自身の能力を話し出す

「キャンセル却下……?」

「そうだ

相手の能力を封じる能力だ」

「そう……

でもね？僕は体術にも自身があるよ!!!!」

アランはそう言いながら瞬歩で一気に近づき殴りかかるが……

バシッ

「!!!!!!」

簡単に腕を捕まれる

「ツクク

俺の2つ目の能力……ノイコール平等

相手の力量と同じに成れる能力だ

但し相手なら数人でも良い……つまり君ら三人+俺が今の俺の力量  
って訳だ……

ツクク……どうする転生者殺し？」

「……………」

アランは何も言わずにもう一度瞬歩で近づき殴るが今度は逆にカウ  
ンターで攻撃（殴り）られて吹き飛ばされる  
吹き飛ばされたまま木にぶつかって煙がたつ

「へえ……確かに桃地、白、そして僕の力量が入ってるばいね」

煙が晴れたその場所には口から血を吐き……先程まで無かったボロ  
ボロの黒い翼と右目が黒く左目が白く成ったアランがいた

「それが……本気モードか？」

「本気……？」

確かに……そうかもね!!!!!!」

先程より更に早く成ったアランは一気に近づきました殴りかかるが……

「まあでも  
意味ないけどね」

「ツグ……!!!!」

「またもカウンターで殴られた  
だけど今回はギリギリ耐えてもう一度殴りかかるアラン」

「無駄だぜ」

「グハッ!!!!」

「次は蹴りで蹴り飛ばされるアラン」

「ノイコル平等は相手が成長……又は封印された力を解き放した場合その分  
追加されるんだぜ?」

「アラン(アラン君)!!!!!!」

「ハアハアハアハアハア」

「血を出して息を切らしながら立ち上がるアラン  
ポロポロな翼が片翼になり左目が青い目に戻っている」

「ん……?」

「なんだあ……もう本気モードは終いか?……まあ良いか……  
もう飽きたし……終わりにするぜ?」

「今度は相手が一気にアランに近づき空中に蹴り飛ばす  
空中に浮いたアランと同時に相手もジャンプして更に蹴りを入れて」

どんだんに蹴りを入れ雲の上ぐらい来た所で今までより一番大きく飛んでアランより上に行って高く上げた足を一気に振り下ろした

「終わりだ！！！！転生者殺し！！！！！！！！  
地獄空中蹴り！！！！！！！！」

急速に落ちてる中殆どない思考で状況を読んでるアラン

（負ける………？

僕が………？負けるのか………

そんなのを認めるのか？

認めるて僕の悪等せうが間違まちがっていると………

そんなの認めるわけない！！！！！！）

ドンッ

漸く地上に落ちたアラン（煙がたってる）

それから数秒後相手も地に足を着ける

「「っ！！！！！！」」

桃地と白は息を呑み

相手を何時もより高い殺気をだす

「ククッ

漸く倒れた………いや死んだな

ククッおいおいそんなに睨むなよお二人さん

それにしても………やはり転生者殺しは伊達では無いな………1人消えただけで此処まで力が下がるとは………」

おどけたように桃地と白に言ってから関心したようにアランに言った

「まあ……」

そいつは死んだが「誰が……死んだって？」つな……！！！！！」

煙の中から声が聞こえそちらをみる相手

其処には珍しくボロボロに成っていてバチバチ音が成っているアランがいた

(ば……馬鹿な！！！！)

あれでも死なねえのか！！！！

いやそれより俺からあいつ分の力量が“消えてる”だと……！！！！！！！！！！)

「吃驚してるかい？」

君も僕に能力を覚えてくれたようだからね……

特別に教えてあげるよ」

煙が完全に晴れて完璧に見えるように成った

その場に立っている……黄色髪と目をしたアランがいた

「これは

忍術・纏いだよ」

「まと……い？」

「雷、水、風、火、土等の性質変化を自身の体内に溜めて爆発させる事によってそれぞれの性質を体に宿す……因みに僕があんな高いところ落とされてピンピンしてる理由は……纏い土を使ったからだよ纏い土は防御力を上げてくれるんだよ

つで今使ってるのは纏い雷」

「纏いかなんか知らねーが何故俺の平等ノイコールが発動してねえんだ!!!  
いやそもそも何故却下キャンセルが発動してねえんだよ!!!!!!」

アランの説明を途中で覆い被さるように疑問に思った事をアランに  
問いかける

「……はあ説明は最後まで聞きなよ……  
まあ……その理由は簡単だよ……先ずは平等ノイコールが効かない訳は平等は  
相手の【力量】だけしか無理なんだよ……  
纏いは確かに力などを上げるけど自身の【力量】出はないんだよ  
ついでに言えば僕の分の力量が落ちてるわけは僕が自身の【力量】  
を殆ど封印したからだよ  
それで次の却下【キャンセル】が効かない理由は……君が一番知っ  
てるだろう?」

「っ……!!!!!!」

アランの言葉を聞き吃驚する相手

「却下【キャンセル】は相手の能力を発動させるんじゃないよ  
相手の能力が空気に触れて発動する時にその出来事を【却下】させ  
るんだよ

アリバイブロッケ  
だから僕の腑罪証明は消えた後に戻ってきて死ぬ気の炎の時は死ぬ  
気を灯す事は出来たのに武器をだす事はできなかった  
纏いは“体内”で発動する力……つまり空気に触れてない  
だから君の却下【キャンセル】は効かないんだよ」

アランがすべてを言い終わった瞬間ゆっくり相手に近づく

「ねえ

雷の纏いの時の性質は何だと思っ?

一つは速度だよ

だけど雷の纏いの性質には2つの能力があるんだよ  
なら2つ目は……?」

其処まで言っていきなり消え……

「答えは……鋭さだよ」

相手の背中ですういった

相手の胸にはぽっくり穴が開きその場所にあるはずの心臓がない

「余りにも鋭いから……心臓なんかも殺さずに取ることが出来るだよ……」

「た…頼む

殺さないでくれ……わ…悪かったから……」

アランの右手にある自分の心臓を見てアランに頼みだした

「ん?

「良いよ」

「ほ…本当か!?!?!」

(やはり人間だな……)

ククツ心臓を奪い返した瞬間殺してやる)



## 任務！！波の国編4（後書き）

はじめてアランが負けかけましたね！！！！  
いやぁ！！！！チートにし過ぎたけど上を考えれば案外いた感じ  
です！！！！

さて今回の残酷な描写は勿論アランが心臓を潰した所等へんです  
ねまあ分かった方も居るかと思いますがハ○ターハ○ターの○ルア  
の戦闘を参考に書きました！！！！

さてそろそろ波の国編に終わりが近づいてきました！！！！  
最近更新が遅いですけど呆れずに見てやって下さい！！！！  
それからアンケート結果で桃地は男性のままです！！！！  
アンケートに協力してくれた方ありがとうございます！！！！

任務！！波の国編5（前書き）

今回はアランの前世の話です

別に見なくても大丈夫な気がしますが……多分前世の話は今回だけだと思いますがね

## 任務！！波の国編5

Sido白

アラン君と謎の人物が戦っていた……

……正直に言うとアラン君と謎の人物は強かった……5影レベル……

……いやもしかしたらそれを超えるレベルの戦い

殺気だけで大気が揺れる……僕は立つてるのがやっとだった

そして漸く長いようで長くない戦いが終わった

「す……凄い」

漸く殺気が無くなり喋られるように成った僕は……それ以外の言葉  
が出なかった

まるで時がとまったかのようにただただ呆然とするだけ……でも時は  
動き出す

バタツという音と共に……

Sido桃地

時がとまったかのようにだった……今まで俺は彼奴<sup>アラン</sup>を目標に頑張っ  
た……殺して殺してまた殺して……その途中で首切り包丁を手に入  
れた……そして俺は彼奴<sup>アラン</sup>と同等……いやそれ以上に成れたと思っ  
ていた……そうだ思っていたんだ……だけど現実<sup>アラン</sup>は違った……彼奴<sup>アラン</sup>は  
昔よりも遥かに強かった

シヨックはあった妬みもあった……だけど同時に嬉しかった……憧  
れた奴は……今も昔も変わりなく強かった事が……

俺達は彼奴<sup>アラン</sup>の戦いをみてまるで時がとまったかのようにいた……け  
ど時は動き出した……彼奴<sup>アラン</sup>が倒れたと同時に……

s i d o アラン

此処は……何処だ

アランは様々な色になる空間にいた

僕は……何をしていただ？

久しぶりに桃地と白に出会って……雇って……そして……転生者と  
……戦った

転生者は正直に言うところ今までの敵で一番強かったし……久しぶりに  
死を覚悟された……でも僕は勝った……じゃあ此処は……何処だ？  
僕は死んだわけではない……様々な色の空間が突然グニヤリと歪  
み新たな空間……いや道場になっていた

「……！！」

そんなんじゃない駄目よ！！！！」

「は……はい」

道場には長い黒い髪をしている女の人と短い髪をした少年がいた  
アランは少年を見て絶句した

ぼ……く？

そう短い髪をしている少年は……前世のアランだった

そして空間はまたグニヤリと歪んだ場所は先程と一緒にだがそこに長  
い髪の少女がいた

!!!!!!

紅夜【くよ】……

「紅夜!!!!!!」

あなたは天才だわ!!!!!!」

長い髪の女（アランと紅夜の母親）は紅夜に近づきそう言う  
昔のアラン……夜半音はその場面を見て悔しそうに……それでも嬉  
しそうに見ていた……

またまた空間が歪み新しい場面になる

そこには高校生ぐらいに成った夜半音と紅夜と男がいた

ただ夜半音は倒れていた

男と紅夜は暫く話して男が道場を出た瞬間夜半音は何事も無く立つ

「あれで紅夜は彼奴とつき合えるのか？」

「うん!!!!!!」

これで 君とつき合える!!!!!!お母様が約束してくださったもの  
!!!!!!」

少女は嬉しそうに夜半音にそう言った

夜半音はそれを聞いてどこか無理しながら少し笑って道場から出て  
行った

道場には歪んだ笑みをした紅夜がいた

またまた空間がグニヤリと歪み次に出てきたのは夜半音と夜半音の  
母親と紅夜がいた

母親は夜半音に刀を向けていた

「な……何故……ですか  
母様……？」

「なぜ？」

それはあなたが一番分かっているでしょ  
才能の無いあなたに最後のチャンスとして      と戦わしたのに負け  
るなんて……だからあなたを私の手によって殺します」

「……紅夜の彼氏を利用したのですか？」

「？」

何を言っているんですか？

が紅夜の彼氏に成れるわけありませんよ  
紅夜も好きではありませんしね」

夜半音はそれを聞いてゆっくり紅夜をみた  
紅夜は歪んだ笑みを浮かべて頷いた

「そう……ですか」

母様……あなたが私程度に手を汚す必要はありませんよ  
私の命は私が……」

「……そうですか」

それを聞いた母親は刀をゆっくり鞘に直して夜半音に渡す  
それをみた紅夜の顔が歪む

何故なら紅夜は知っていたのだ

夜半音の実力を……だから刀を渡した瞬間私を襲うと思って身構えた

その予感は当たり夜半音は刀を持った瞬間信じられないスピードで母親を気絶させて紅夜に近づいた……そして……斬った自分の腹を……それを絶句した顔で見た紅夜

「ゴホツ……ハアハア……分かってたよ

紅夜……君は嘘をつくとき必ず右手で左手をさする癖があるからな……」

笑いながら紅夜に言う夜半音

「な……なら……なぜ」

「ふふ……」

妹の頼みを……初めての頼みを断る兄がどこに居るか……少なくとも俺には無理だった」

「……馬鹿……ですね」

「分かってる……」

俺は……兄馬鹿だ……」

「う……ごめんなさい」

紅夜は泣きながら夜半音に言った

「駄目だ

許さない」

「っ……!……!……!」

夜半音は笑顔からいきなり真顔で言った  
それを聞いた紅夜は悲しそうな顔した  
そんな彼女を見て再び笑いながら口を開く夜半音

「だから……お詫びとして生きる」

「……っえ？」

夜半音の言葉を聞いて絶句した紅夜

夜半音はゆっくり手をあげて頭を撫でた

「生きて生きて……好きな奴をみつけるなり

好きな事をみつけるなりしろ

世の中は辛い事が沢山ある

嬉しい事なんてほんの少ししかない……死んだ方がましだと思つ時  
がある……でも……な

辛い事が後に成つて笑える……ああんな事もあつたなあ……つて

だから……そう言えるように生きる……

それが……兄馬鹿の妹に願う馬鹿な願い事だ」

「う……うん

約束……するよ

絶対……その馬鹿な夢……叶える」

「……ありがとう」

夜半音は笑いながら目を閉じた

それと同時に空間が歪み始めの様々な色がある空間にいた

「……そう

あれが僕が死んだ理由……ふふ  
まさか僕が兄馬鹿だったなんてね……  
紅夜……僕も馬鹿な夢を叶えるよ」

空間がピシリッと割れた

割れ目から光がさす

「……ふう

目覚め時かな？

さて……頑張って行こうかな」

そう……笑いながら言うアラン

## 任務！！波の国編5（後書き）

さて……波の国編って書いてるのに全く波の国編が進んでない……  
…なんて感想はいいりませんから  
私自身が一番分かってますからね

まあそれはそうとして……優氣凛々さんの作品エネル授天力の戦士が世界  
を廻る・作るぜ！！最強の”絆”！！…にアラン君が出演しました  
！！！！！！

皆様も見てみては……？（まあ…ヴィータ好きは止めた方が良かった  
も知れませんが……）

朧さんの作品遊戯王 S a t i s f a c t i o n a s k f o r  
もかなり面白いです

まあ全部面白いんですがね  
まああとはレイもヒロインに加われば………っと話がずれましたな

ではまた次回お会いしましょう！！！！！！

波の国編6（前書き）

「はい

久しぶりに前書きで話しました

今回もアラン君は居ないけど変わりにアテムさんが来たよ」

「久しぶりね

みんな」

「皆さん覚えていますか？

天照のアテムさんですよ

さて早速なんですがアテムさん

優氣凛々様の作品ユウタ君から伝言があります」

「ユウタ？

ああ……エリリイを落としたあの可愛い坊や

なんて言ってたの？」

「えっと

『いつもありがとう!!』

なんかあんちくしょうはニブチンだけど色々頑張れ!!……』」

「……確かに彼はにぶちンだけど……べ……別に私は好きじゃないわよ？」

気になるだけよ／／／／」

「本当に？」

「本当よ／／／／」

「本当に本当？」

「本当に本当よ／＼／＼」

「ならアランの『好きだよ』と囁いてるテープはいらんか……」

「……！！！！！！」

ほ……欲しい！！！！！！」

「あれ？」

好きじゃないんじゃないの？」

「っっっ……っっっ……っっっ／＼／＼／

好きよ……」

「っえ……？」

なんて??？」

「好きよ大好き／＼／＼」

「そう初めから素直に成ってたら良いんだよ  
はいテープ」

カチッ

『好きだよ』

「アラン……／＼／＼／

っん……」

「さて……と」

アテムがテープを何度も再生して【18禁】なことをしだしたので  
前書きはこの辺で……では楽しんできて下さい」

## 波の国編 6

sidooアラン（分身体）

あれからサスケとナルトにアドバイスをしていたらいつの間にか夜に成っていた……二人共木の天辺まで登れた……っえ？クウロは？知らないよ興味ないしね

まあ二人共ボロボロに成ってたから背負ってあげてどうにか帰ってきた

クウロは……まあ自力で帰ったらしいby作者

ん……？

今声が出たような……？

気のせいかな？？

え？今何してるか？ご飯食べてるよ

……ねえクウロ？

食べるのは良いけど……吐くのは辞めてくれない？

食べる気が無くなるから

ほらサクラも引いてるよ？

それに食べながら僕を睨むのも止めてよね

やらないからね？

つとほのぼの？としてるとあのじいさんの孫娘の……たしかフシミが立ち上がり……

「どうしてそこまで頑張るんだよ……！！」

どんなに努力しても結局ガトーに殺されるんだよ……？

なのに……なんでそんなに頑張れるんだよ……!」

「五月蠅いよ(てばね)……」

君みたいな泣き虫は隅っこで泣いてなよ」

「つちよ……2人共言い過ぎ……」

ナルトとサスケは黙ったまま外に行った

クウロは……吐きすぎてダウン

サクラはオロオロ

……本当使えないね

フシミはベランダ?で落ち込んでいる

カカシはフシミに近づこうとしたけど……アランが右手でカカシを止めた

「ここは僕に任せてよ」

ツフと笑いながら言うアランに赤面して止まってしまうカカシ  
そんな事も知らずにフシミに近づいて隣に座るアラン

「……分からないよ

なんで……無駄な努力なんか……」

「フシミには2人の努力が無駄に見えるかい?」

アランはフシミの疑問に質問で返した

フシミはアランの質問に対して無言……そんな状態にアランは一息

ため息を吐き……

「少し……話を聞いてくれる？」

「……………」

アランがそう言うとコクンと頷くフシミ

「今から話すのはある少女2人の話……

まずは1人目……金髪少女の話だよ

彼女は生まれた頃から……1人だった」

「……………」

アランの言葉に目を見開くフシミ

「周りからは何故か化け物と呼ばれ……嫌われていた

でも……彼女は諦めなかった……

皆に認めて貰おうと……彼女は今でも頑張ってる」

「……………」

「次は黒髪の少女の話……」

アランの話を黙って聞くフシミ……アランは淡々と話を続ける

「彼女は1人ではなかった……途中までは」

「？」

アランの話に首を傾げる

「殺されたんだよ」

それを聞いて青ざめる

「彼女は復讐を誓った……父を……母をころした奴を殺す……と  
でもある少年が言った事によって……復讐を諦めた……その代わり  
新たな夢を見つけそれを叶えるために今も努力をしている」

アランの話は終わったようで一息つき……

「僕は……そんな彼女達の……いや……努力をしてる人に……“無  
駄”な努力なんて無いと思うよ……君には無かったかい？」

「……………」

「フフっ……………」

まあ……無いなら良いけどね……

でも……もしあったなら……もう一度努力したら？

一度の失敗で諦めないで……ね」

フシミの頭を一度撫でて家の中にはいった

S i d o アラン（本体）

「……………っん？」

ふぁ……………」

目を覚ました場所は小屋みみたいな場所だった

「アラン君……!!」

「っわ!!……!!」

な……なんだい？

……ん？白？

「良かった……良かった……」

「ごめんね……」

心配させて」

「うっん……」

良いんだよ……生きていてくれるだけで……」

数分後……

「ねえ

白？」

「なんですか？」

「何時まで抱きついてる気だい？」

「っえ？……あっ……「ごめんなさい……!!」……」

アランに言われ自分が抱きついている事に気づいて一気に離れる白

「君も女の子なんだから抱きつくのは好きな人にしなよ？僕だから

良かったけど違ったら勘違いするよ?」

「アラン君なら勘違いしてもいいのに……」

「なにか言ったかい?」

「う……うん」

「なにも言っていないよ!?!?!」

「?」

「そう……なら良いけど」

アランは見事な鈍感っぷりを発揮していた

「………そう言う場所は相変わらずだな………」

「?」

「何がだい? 桃地」

「「はあ」「」

桃地と白は同時にため息を吐いた

「訳の分からない2人だね……」

まあそんな事より早く移動しようか

僕もそろそろ戻りたい(影分身と変わりたい)しね」

「ああ

「そうだな」

桃地と白はアランの肩に手を載せた

「アリバイブロック  
腑罪証明発動」

こうしてアランと白と桃地は消えた

数分後……

させ……と

桃地と白を僕の家の近くに買った家に連れて行って影分身と変わった所何だけど……色々あったみたいだね……それにしても……吐きすぎてダウンって……本当に使えないねクウロは……  
まあ……居たからって何が出来た？って話なんだけどね……  
さてとまあ……今から何をしようかな？

『アラン様』

ん？この声はたしか……

「ルシファーか？」

『はい』

そうです』

「？」

何処にいるんだ？」

周りを見て言うアラン

『これは念話と言うもので天使や悪魔や神などが使う魔法？みたい

なものです』

「僕も出来るのかい？」

『はい』

心の中で思った事に神力……アラン様ならチャクラでしょうか？を集中させてみてください』

.....

『こんな感じか？』

『はい！！』

完璧です！！！！さすがアラン様！！！！！！』

『其処まで寝めなくても良いよ  
それで……何かあったのかい？』

『つえ？』

あっ！！！！！！そうでした！！！！！！

今アラン様に会いたいわって方が居るんですが……』

『僕にかい？』

『はい』

『まあ……別に構わないけど……』

どうやって其方に行ったら良いんだい？』

『寝てるときに前回行ったアラン様の空間を思い描いてくだされば』

此方にこねます』

『それだけで良いのかい？』

『はい』

『なら今からそっちに行くよ』

『はい！！！』

楽しみに待ってます！！！！！』

ルシファーとの念話が終わり自分の（借りてる）布団に入り目を瞑って自分の空間……灰色の空間を思い描いた瞬間眠気がきて一気に寝た……

## 波の国編6（後書き）

……中途半端だな

そして久しぶりに登場のルシファー

それと新しいキャラの予感……アランに会いたって言ってる人物は誰なのか……

それから今日からキャラ人気を集めたいと思います

見事第一位に選ばれたキャラの話を載せたいと思うのでドシドシ応募下さい

アランが一位の場合は二位との話を書きます

1人3票までいけます

あとついでにアランが使うオリジナル忍術、異常、荷負担、スキルも募集します

あと最後にイナリ君のアンケートにお答え七夜士郎様パンチ様ありがとうございます  
がとうございました

パンチ様が考えて下さった名前もありがたく使わせていただきます  
ではまた次回お会いしましょう！！！！！！

アラン&ユウタ まさかのコラボ！！！！！！（前書き）

「はい

今回は優氣凛々様の作品授天力エネルの戦士が世界を廻る・作るぜ！！最強の”絆”！！ - から御神ユウタ君が来てくれました」

「よう

アラン久しぶりそして魁斗はじめましてだな  
今回はこの作品の読者を頂にきたぞ」

「っえ……？

いまなんか幻聴が……」

「ユウタ無駄だよ

この作品そんなに人気無いから  
そんなのするなら他の人気がある作品に言った方が良いでしょう」

「……冗談で言ったんだが……それにアランお前辛口だな……」

「本当の事だよ」

「もう……やだこの子……」

「大変だな魁斗も……」

「じゃあ

読者の君達楽しんできてよ」

アラン&ユウタ まさかのコロボ!!!!!!!!!!

ある草原にアランは立っていた

「もうそろそろかな？」

そう言った瞬間空間がパツクリ開いて1人の美少じ…………ゴホン…………  
ではなく美少年が居た

「久しぶりだね

ユウタ」

アラン振り向きながら美少年の…………ユウタに言った

因みにユウタってのは優氣凛々さんの作品の主人公だよ

「ああ

久しぶりだなアラン

それで？今回はどんなようでよんだんだ？」

「まあ何時もなら僕の暇つぶしに戦ってって言うんだけどね…………今  
回は転生者潰しを手伝って貰おうと思ってね」

「…………お前でも勝てない相手なのか？」

「そんな訳ないよ」

ユウタはアランが手伝いを頼んできたのに驚いたがもしかしたらア  
ランでも勝てない相手なのか？っと思いいアランに聞いた

「僕一応最高神だよ？」

曲がりなりにもね……

そんな僕が負けるのは余程の事が無いと無いよ」

「余程の事があつたら負けるんだ」

「当たり前だよ

僕も生き物だからね

因みに僕に勝ちたかつたらゼウスとアテムをつれてきたら本気の七割は出せるんじゃない？」

「……………それほぼ最強じゃねえか」

アランの言葉に呆れながら言うユウタ

「まあ幻想殺しみたいな能力があればなかなか苦戦はするよ  
まあ……………身体能力も異常なただけだね」

「……………もう良いから俺をよんだ理由を教えてくれ」

「ん…………？」

ああそんな話をしていたね」

「忘れてるんじゃないよ……………!」

アランの言葉にツツコムユウタ……………あれ？こんなグダグダで良いのかな？ユウタのキャラってこんなんで良いのかな？つと不安がる  
作者

「良いんだよ

君の力量ではこんなもんだよ」

「地の字に言うなよ!!!!!!  
つて!!!!!!また話が逸れた!!!!!!」

「まあ

無駄な話は此処までにして……………」

「……………自覚があつたんだな」

もう疲れたような顔をするユウタ

「ユウタをよんだのは……………まあユウタの修行に役立てて貰おうと思っただけだよ」

「……………つえ？」

「ユウタもこれから転生者と……………まあ今も屑と戦ってるけど……………それ以外の転生者とも戦つかも知れないわけでしょ？なら転生者との戦いに馴れて貰おうと思っただけ……………ちよつど異世界に10万人ぐらいの転生者が居るらしいんだよ」

最後まで聞いたユウタの顔がピシヤリと止まった

「……………なあ

アラン」

「？」

なに??？」



「……何気に酷いこと言ってるねえか？  
つてか俺負けてねえ」

「……負けてたよ」

ユウタの言葉に呆れた目をして言うアラン

「負けてないつと認めない限りは負けてねえんだよ！……！！  
それに次は勝からいいんだよ！……！！」

「……いまの言葉（次はつて所）負けたって認めてるよ……」

「い……良いから！……！！  
速く行くぞ！……！！」

「はあ………全く」

でも………速く行くと言う部分には賛成だよ  
無駄に時間使ったからね………じゃあユウタ僕の肩を掴んで

「おう！……！！」

アランはため息を吐きながらも速く転生者狩りに行くことと言つ案？  
に賛成してユウタに肩を掴むように言った  
ユウタはアランの言葉に頷いて肩を掴んだ

アリバイブロック

「腑罪証明発動………行き先は………リリカルなのは世界！……！！」

「つえ………？」

いまなん

ビシュン！……！！……！！

.....

「っ……………!!!」

おい!!!アラン人の……………」

ユウタは人の話を聞けつと文句を言おうとしてアランを見たがアランを見た瞬間啞然とした

……………何故か?それは……………

「何故小さく成ってるんだアラン!!!!」

ユウタより少し低いぐらいまで縮んでるアラン

……………説明中

「つまりアランが使用した腑罪証明アリバイプロックで二人同時に異世界に跳んだ為アランが縮んだって事か?」

「まあ

簡単に言えばそうだね」

「でも……………アランってこうして見れば女が「なんか言ったかい?」  
いえ……………なにも」

いつの間にか持ってたトンファーをユウタの首に当てて殺気をだしながらいったアラン

そんなアランに冷や汗を流しながら答えるユウタ

それを聞いてトンファーを首から外してまるで何も無かったかのよう  
うにトンファーがどこかに言った

トンファーが出たり消えたりした理由は奇術師【マジシャン】と暗器術師【ブラックマスター】の能力のおかげです  
詳しくははたけカカシVS青葉アランを見て下さい

「っと……」

そうだった……さっき移動した時にリリカル“なのは”世界って言うってたよな？

もしかして……」

「違うよ

君が居たりリリカル世界ではなく……全く違う第二のリリカルなのは世界って言えばいいかな？

だから君がいる世界とは違うよ」

「……そうか」

「っと……漸く見つけたよ」

アランがユウタの疑問に答えていると突然何かを見つけたっと言い出すアラン

「何を見つけたんだ？」

訳のわからないユウタはアランに聞いた  
アランは呆れたような目をユウタに向けた

「僕達は転生者狩りに来たんだよ？」

見つけたって言ったら転生者が集まってる場所に決まってるでしょ」

「？」

なぜ転生者が集まってるんだ？？」

「ああ

まだ言っただけでなかったね今回は転生者達が集まった軍団……たしか……  
……スクール……そんな名前だったね

目的は屑（咲哉）と似ていて可愛い女の子を奴隷にするだったよ」

「……なに？」

それを速く言えよ！！！！速く行かねえともう捕まってる子が「安心しなよスクールが活動したのは三時間前……つまりまだ本格的な活動はまだなんだよ」そ……そうかなら安心だな」

「まあ……何時活動するか分からないから速めに言った方が良いのは確かだからね  
また移動するから肩を掴んでくれるかな？」

「ああ」

ユウタがアランの肩に触れた瞬間また2人は消えた

……

「あともうちよつとだ……あともうちよつとでなのはたちを……」

「……グへへへへ」「……」

ある場所にイケメンなのに近寄りたくない雰囲気を出してる男達  
がいた

その場に突然美少女……美少年の2人が現れた

すいませんマジすいません謝るから命だけは……

「……特別だよ(だぞ)」

さて……まあメタな事は置いて……突然現れた2人に吃驚していた男達だが1人が口を開いた

「ん？」

なんだ？君たち？俺達に犯されに来たのか？？」

「……マジかい?!こんな美少女なら大歓迎だ!!!!!!」

1人の男の言葉を聞いて周りの男達が盛り上がった

「よかったねユウタ

モテモテだよ」

「何言ってるんだよ

アランお前がだろ」

「ユウタは女顔なんだからユウタに決まってるよ」

「今のお前も女顔だろ……」

「……かみ殺す(灰にしてやる)!!!!!!」

いきなり口論を始めたと思ったらさっき出して(アランはユウタにユウタはアランに)戦おうとした瞬間また男が出てきて

「まあ

2人共落ち着け」

「……………」

2人を宥めようとするが2人共その男を見ていない  
見ていないにも関わらず話を進める男

「2人共可愛いからちゃんと2人共犯してあげるから……………喧嘩はし  
たら駄目だぞ」

「そうだけ

俺達はお前等2人を可愛いがってやるから」

他の男達も色々言っていたらアランとユウタ下を俯き話をする

「ねえ……………ユウタ」

「なんだアラン」

「君をかみ殺すのは後にするよ」

「奇遇だな……………俺もお前を灰にするのは後にするぜ」

バツと顔を上げて……………

「まずは君達（お前等）をかみ殺して（灰にして）あげるよ（して  
やる）……………」

男達にさつきを出した

そしてアランは異常の奇術師と暗器術師を発動してトンファーを取

り出しユウタ……

「サンライト

set up!!!!!!」

「yes my master!!!

version “K” set up!!!!!!」

ユウタの手に刀が握られた

「疾風迅雷!!!!!!」

ユウタは目にも止まらない速さで転生者達を狩る

「へえ……やるねユウタ」

「つくそ!!」

そっちの化け物じゃなくこっちの奴を先にや」

「君……遅いよ」

アランはいつの間にか変わってた黒い刀で転生者を狩る

「アラン!!!!」

お前に俺の新しい力を見せてやる!!!!!!」

「へえ……」

それは楽しみだね」

戦いながら話をする2人

そして突然止まったユウタ

「身体能力強化“王臨”のうりん！……！！

れんおうがいこう  
錬王凱哮！！！！！！」

ユウタの髪の毛が漆黒に染まった瞬間今までより更に速く更に強力な攻撃を شدした

「へえ……身体強化……これは僕も負けてられないね……」

「スキだらけだ！！！！」

「……うおおおお！！！！！！！！！！」

「僕も少し本気を出そうか……我が名は阿濡美須王汰那斗簾神……我が力の一部を見るがいい」

何時もの黒い翼は出てないが黒い目と白い目

そしてユウタと似ている黒い髪になった

違うとしたらユウタの髪は闇を連想させる

アランの髪は“死”の闇を連想させる色だ

そしてアランの周りを囲んでいた男達が倒れたと同時にアランも動いた

数分後……その場にはアランとユウタがいた

ユウタの髪がゆっくりと元の色に戻りアランの目と髪も元に戻った戻ったと同時にユウタが大の字でその場に倒れた

「どうだい？」

初めての転生者狩り」

「疲れた……ってかお前はなぜ倒れない？また大嘘つき（オールフィクション）か？」

ユウタがアランが倒れない理由は大嘘つき（オールフィクション）のおかげかを聞いた

「違うよ

今回は使ってないよ」

「ならなぜ倒れないんだ？」

「馴れだよ」

「馴れ？」

「一応これ位の数を倒すのは結構してたからね  
これぐらい戦ったぐらいじゃ疲れないよ」

「はあ……お前に何時になったら勝てるやら……お前から神の力を授かったら少しは近づくか？」

ユウタがアランの強さに吃驚しながらもアランから神としての力を貰ったらどうなるかを聞いた

「やめた方が良いよ」

「？」

「なんで？」

「僕はなんの神か知ってるかい？」

「死の神だったよな？」

「その通りだよ

神つてのは1人ではなく沢山いる  
癒やしの神つて言ってもエリリイ以外にもいる……まあエリリイが  
癒やしの神の中では上位だけどね」

「へえ」

アランの話に真剣に聞くユウタ

「でもね

死の神は数が少なく殆どが下級神レベルなんだよ」

「なぜだ？」

「死の神が上に行くためには…様々な死を経験し体現しそして理解  
しないといけない」

「!!!!!!」

…じゃあアランは」

「僕は裏技を使ったんだよ」

「裏技？」

「未来、過去、現在の神界、地獄、魔界、天空、下界の全てのしを  
体現できる生き地獄と呼ばれる扉の中に100000万年間耐えた

……だから僕は死を経験し体現しそして理解した」

「……………」

アランの話に啞然とするユウタ

「だから

僕が君に力を渡すと君の体と心が“死”ぬ  
だから無理なんだよ」

こうしてアランの話が終わった

「さて……

どうやらお別れのようにだね」

アランはユウタの方を見ながら言った

ユウタも自身の体を見るとどんどん薄く成ってるのがわかる

「な……なんだ

これは……………」

「安心しなよ

唯単に君の世界に帰るだけだよ」

「そう……か」

「なに寂しそうな顔をしてるんだい？」

「……………してねえよ」

「ふふ……………まあどっちでも良いんだけどね……………」

またね……」

「……………」

いま……………」

この瞬間ユウタは消えた……………」

S i d o ユウタ

全く……………あいつときたら……………」

「ユウタあ

おかえりなさいですう」

ユウタが声をした方をみるとエリリイがいた  
ユウタは少し微笑んだ

「ああ……………ただいま  
エリリイ」

また会おうな……………親友

アラン&ユウタ まさかのコラボ!!!!!! (後書き)

「はぁ……もうお別れ……か」

「寂しくなるな……って言う場面なんだろうけど……僕にとっては  
慰めてくれる人が居なくなる……って言った方が良さだろうな……  
……」

「まぁ……なんだ  
頑張れ……」

「ありがとうユウタ君……」

「ユウタ  
はいこれ」

「?」  
「なんだこれ？」

「軽く作ったケーキだよ」

「軽くじゃないよな!!」  
「なんだよこの大きさ!!!!!!」  
「軽くでこんなのつくれねえよ!!!!!!」

「ああ……アラン君家事とかも完璧だからそれぐらいのケーキなら  
軽く作るよ……しかも軽くプロを越えてるし」

「……完璧人間って訳か」

「まあ

ユウタ君また来てよいつでも歓迎するし」

「暇になったらまたそっちに行くよ」

「ああ

ありがとうな魁斗

そして待ってるぞ親友！！！！！！」

そう言っつて消えたユウタ

「はあ……寂しくなるな」

「そうだね

だけど何時までも悲しんでは入れないよ」

「うん

分かってるよ……

ではまた次回お会いしましょう！！！！！！」

「またね」

誤字がありましたので修正させて頂きました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7488v/>

---

NARUTO ~ 転生と始まりと終焉 ~

2011年11月6日03時12分発行